

---

# 機動戦士ガンダム00ALT

ヨシヒロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダム00A L T

### 【Nコード】

N 8 6 8 9 N

### 【作者名】

ヨシヒロ

### 【あらすじ】

リボンズ・アルマークとの最終決戦から二ヶ月。

戦いの傷が癒え、次のミッションのため地球に向かう刹那達は、ヴェーダによりある「地球」に飛ばされた…。

イノベーターとして覚醒した刹那はそこで何を見るのか…

救済の00が諦めきれず、劇場版に誘発され書いた物です。救済の

行き詰まりのガス抜きを兼ねた作品です。

## 第一話（修正）

） 外宇宙探査船 ソレスタルビーイング ）

宇宙にそびえる巨大な岩塊。遠目から見れば小惑星にしか見えな  
いが、良く見れば巨大なスラスタールや岩塊を一周する程の大きさを  
誇るリングが見える。この岩塊は、イオリア・シュヘンベルグが建  
造した外宇宙探索用の巨大な宇宙船であった。

数ヶ月前に行われたイノベーター対ソレスタルビーイングの戦闘  
によるジャンクは殆ど片づけられ、その殆どはソレスタルビーイン  
グが回収して再利用をしていた。

そして今、その巨大な基地から一隻の戦艦が発進しようとしてい  
た。

「スメラギさん、補給物資の積み込みとガンダムの格納庫の収容  
全部完了ですう〜！」

「全システムオールグリーン。GNドライブ、全基正常稼働中…。  
こちらにも問題ありません」

「ありがとう、二人とも。…さてティエリア。あなたの指示通り  
トレミーの発進準備は完了したわ。ヴェーダを通じての指示だった  
みたいだけど、いい加減ミッション内容を教えてくれないんじ  
ゃない？」

トレミーのブリッジには、戦術予報士のスメラギ・李・ノリエラ、  
通信管制担当のフェルト・グレイスにミレイナ・ヴァステイ、操舵  
士兼砲手のラッセ・アイオン、そして入り口に立っているおやつさ  
んことイアン・ヴァステイの五人がいた。

そしてスメラギはモニターを見ながら話している。∴ 別にお酒の飲みすぎで変になった訳ではない。断じてない！

『ミス・スメラギ。残念ながら、私もまだヴェーダから情報をもらっていない。全ガンダムの修理を終え、ソレスタルビーイング（ココ）から発進し地球に向かえの一点張りだ。しかも、僕の機体まで修復させて…』

会話をしていたのは、現在肉体を失い、ヴェーダと意識を一体化させたティエリア・アーデだった。本人も、ヴェーダの奇行に疑問を隠せないようだ。

「まあ、元々あったプランの前倒しだから問題はないんだけど… ∴ 発進後はマイスター全員に戦闘態勢をとってもらうことで対応しましょう。それじゃあティエリア、行ってくるわね」

「行つてきますです！アーデさん！」

「行つてきます」

『ああ。みんな気をつけて。他のマイスターの皆にもよろしく伝えておいてくれ』

『メインゲート開放』

『トレミー、第三戦速で発進！』

ガコン、と重低音が響き、ドックの扉が開き漆黒の宇宙が顔を出した。

トレミーは、翠色のGN粒子をスラストから噴出させながらソレスタルビーイングから発進し、地球へと進路を取った。

「しっかし、ようやく発進か。待ちくたびれたぜ」

イスターの中で最年長であるロックオン・ストラトスことライル・デイルンディは、壁にもたれながらそう呟いた。

「まあまあ。あれから一月経ったとはいえ、あれだけ壊れたモビルスーツとトレミーを、この短期間で完全な状態に戻せたんだ。ラッキーな方だと思うよ」

してロックオンの反対側の位置に立っていたアレルヤ・ハプティズムは、そんな疲れた様子のロックオンを労うように声をかけた。

「そうね。…でも、何で二月も計画が早まったのかしら？それさえ無ければ、機体の強化もできた筈なのに…」

アレルヤの隣で、彼に体を寄せているのはマリー・パーファシーである。彼女はイアンと共にガンダムの修理を手伝った影響か機械弄りに目覚め、この任務で延期になってしまったガンダムの改造で落ち込んでいるようだ。

「そう気を落とすこともないだろう。トレミーの中でも、案を練ることくらいはできるはずだ。暇になったらイアンの所に行けばいい」

そして、最後にしゃべったのが刹那・F・セイエイ。この四人は、スメラギの指示で何時でも出撃できるよう待機している。全員、先のリボンス率いるイノベーターとの戦いの傷は、ほとんど癒えていようだ。その証拠に、皆表情は柔らかく時折笑顔を見える。

「…それもそうね。ありがとう、刹那！」

「そういえば、ダブルオーのGNドライヴが無事で何よりだったね、刹那。まさかOガンダムにあんな緊急機能がついていたなんてね」

「ああ。だが、ティエリアのセラフィム（機体）は作動する前に撃墜されたからな。GNドライヴで代用したみたいだが、性能が若干落ちて、落ち込んでいたぞ」

刹那の無意識でついただじゃれにロックオン達は笑い、なぜ笑ったのか理解できず頭に？を浮かべた刹那を見て、もう一度笑い転げるのだった。

…その笑顔が、すぐに消えるとは知らずに。

トレミーがソレスタルビーイングを発進してから二日が経過した。その間は敵襲も無く、実に平和で暇な時間であった。ヴェーダからの暗号通信が来るまでは…。

「スメラギさん、ヴェーダから暗号通信です。…解析完了、モーターに出します」

「…なに、このメッセージは？それにこのコードは一体…」

ビ　　！！ビ　　！！ビ　　！！

突如、ブリッジに異常を知らせる警報が鳴り響いた。慌ててフェルトとミレイナがコンソールを操作し場所を調べる。

「！？一体どこから……フェルト！！」

「ッ！出ましたです！ガンダムの格納庫からです！！」

「ガンダムの！？イアン、どうなってるの！？」

スメラギは通信を格納庫でガンダムの整備をしていたイアンに繋げる。すると、慌ただしく八口達に指示を出しているイアンの姿が映し出された。

7

『おお、丁度よかった！一体何の騒ぎだ！？いきなりセラヴィー以外のガンダム三機が起動したと思ったら、いきなりトランザムの起動シークエンスに入っちゃった！！しかもこっちの操作を一切受け付けないんだ！！』

「…太陽炉が起動しただけなのね？」

『ああ！機体の方もうんともすんとも言わ……ッ！！トランザムが始まった！』

四基の太陽炉は、トランザム発動の影響で紅く染まり、夥しい量のGN粒子を撒き散らした。逃げ場の無い粒子はヴェーダの暗号通信で強制解放された隔壁から噴出し、その量のせいで船体がガタガタと揺れる。



「ス、スメラギさん！今度はセンサーがダウンしたです！ああ！  
！艦の制御が次々と…！」

「クツ…！一体何をさせようとしているの、ヴェーダ!?」

スメラギが睨み付けるモニターには、ヴェーダが送ってきたメッ  
セージが表示されていた。

『イオリア計画のため……いつてらっしやい』

と。

トレミーは、GN粒子でできた四つの円に包まれた。そしてその  
四つの円は次第に大きさと密度を大きくしていく。暫くし、船体全  
てを覆い尽くしたGN粒子は、次の瞬間、円はもちろんGN粒子は  
消え、トレミーも消失していた。

） 2001年12月22日 ラグランジュ4宙域 ）

「うつ…。ここは…一体…？ ツ！そうだ、フェルト、ミレイナ、  
大丈夫!?」

非常灯だけが灯ったブリッジで、一番早く目が覚めたのはスメラ  
ギだった。急いで近くで倒れている二人を起こす。

「むにゃ…ママァ、後五分…」

「ううん……刹那……く…」

「……………いい加減起きなさい!!」

ガチコンツ!!

「い、痛い痛い　!?」

二人の幸せそうな寝顔に、少量の嫉妬を込めて拳を降り下ろす。実にいい音が響き、二人はすごい勢いで飛び起きた。

「な、なな何です何です何です!? 敵襲ですか!?!」

「うう…、スメラギさん、痛いです」

「ミレイナは落ち着きなさい。それより、早くトレミーの状態を確認して! 後格納庫も。大至急!!」

「は、はい(です)!!」

フェルトとミレイナはコンソールに飛び付くと、すごい早さでキーを押していく。すると、艦内のエネルギーラインが開いたのか、ブリッジの照明が点き明るく照らす。

「イッテテテ…。ん? 何があつたんだ?」

「ラッセ、大丈夫? 大丈夫なら艦の復旧を手伝って。あのGNDRライヴの暴走で、まだトレミーが動けないのよ」

「マジかよ…まあわかつた!」

「格納庫のパパから通信です! ガンダム全機異常無し。ただ、GNコンデンサー内のGN粒子がすっからかんなので暫くトレミーもガンダムも動けないみたいです」

「トレミー本体にも損傷はありません。八口達が急ピッチで確認

してくれたお陰です」

スメラギ達が目を覚ましてから暫く。トレミーの全クルーはブリッジに集まっていた。もちろん、マイスター達四人もここにいる。マイスター達も、目は覚めていたのだが、フェルト達が艦のシステムを復旧するまで閉じ込められていたのだ。

「ひとまず、どこかの回線にハッキングして情報を引き出そうとしたんだけど…」

「おいおい、どうしたフェルト？何かあったのか？」

情報においてのエキスパートであるフェルトが言葉を濁す。その今まであり得なかった状況にみんな息を飲む。

「実は…ハッキングするだけのつもりだったんだけど…」

「…」

「調子に乗って相手のマザーコンピューターまで掌握しちゃって…。で、出てきた資料がこれなんです」

そう言ってコンソールをピポパ。正面のモニターに、何か、が映し出された。

始めは皆、何が映っているのか理解が追いつかなかったが、数瞬後にはその正体に気付き脱力した。

「……一体何処のB級映画のワンシーンだこれは。オルタネイティブ計画？戦術機？BETA？」

「…それが、これ全部国連本部の最重要機密情報なんです」

ピタリ、とふざけていたロックオンはもちろん、ブリッジにいた

全員が固まった。

「多分、そろそろ外の映像が入るから、それが証拠になる。そして、ヴェーダが最後に送ってきたメッセージはそのままの意味だと思うの」

そして、全員でモニターを見る。映像は船外活動をしているハ口とリンクしているので若干画質は悪いが、トレミーの影から出ようとしているようだ。

やっとトレミーの青い装甲が消え、漆黒の宇宙空間を映し出す。

二、三回ほど姿勢制御で揺れた後、映像はゆっくりとスライドし…

「なっ…!?!」

「ウン……」

「軌道エレベーターが…」

「無い…?」

「今は、西暦2001年。私達の居た時代から三百年以上も昔の地球なの」

「その通りだ」

フェルトの言葉を肯定する声が、入り口から聞こえてきた。突然聞こえてきた声に驚いて振り向くと、そこには今は死んで肉体が無い筈の

「……………ティエリア（アーデさん）!?!」「……………」

ティエリア・アーデが立っていた。

## 第一話（修正）（後書き）

テイエリアはロボット、またはイノベイドの体を作り人格をコピーしたという設定です

## 第二話（前書き）

これで打ち止めです。次話は何時になるか不明です…。

## 第二話

「 プトレマイオス2 」

「 みんな驚いているようだが、僕は精神データさえあれば肉体は死んでも別の体に移ることができる。これもその内の一つだ 」

テイエリアの突然の登場に、ブリッジにいた全員は軽恐慌状態に陥っていた。が、その混乱は当の本人の解説と、刹那の呟きによって収められる。

「 ……聞こえる。あの地球から…無数の叫びが…憎しみの声が…! 」

「 …やはり、真のイノベーターとして覚醒した君には聞こえるか、刹那。…フェルト、さっきの情報をもう一度みんなに見せてくれ 」  
「 り、了解! 」

そして映し出されたのは、先程の映像データとは違った年表であった。それは、刹那達が知っている地球の歴史とは異なり、この「地球」は第二次世界大戦の日本の最後から歴史が変わっていった。モビルスーツの代わりに戦術歩行戦闘機という人型汎用兵器の登場から始まり、月面基地設立など、全く知らないものばかりだったのだ。そして、トレミークルを一番驚愕させたのは、BETAの存在であった。

木星でその存在が確認されてから半世紀。その間に、人類はユーラシア大陸のほぼ八割を占領されているという現状も相まって。

「…この地球の人類は、既に異星人と接触していたのか…」  
「接触なんてモンじゃねえ…侵略だぜ、こりゃあ…！」

イアンの呟きに、ロックオンは苦虫を何匹も噛み潰したような顔を  
をする。

「ヴェーダは、ダブルオーライザーが粒子化した時のデータで粒子化した瞬間、この世界の存在を感知したんだ。そして検証の結果、四つのGNドライブを繋ぎ、同時にトランザムを起動することでトレミーサイズの戦艦ならこの地球に来ることが可能だとわかったんだ」

「そして恐らく、ベータはこの地球に飛来したBETAと接触させることで、イオリア計画を完璧なものにするために送り込んだ…」

「…テイエリア、違う？」

「いや、フェルトの言う通りだ。それに一応、僕達の地球へは何時でも帰還可能だ。計画の方が本命だからな」

「…だが、だが俺は！このまま見捨てる事はできない！聞こえた声は、今尚助けを叫んでいるんだ！！だから俺は残る！そしてこの地球の人類を救う！」

刹那の悲しみに満ちた叫びに、ロックオン達は顔を見合わせる。

そしてお互い考えていることが同じだとわかると、苦笑しながら刹那を見た。

「そんなじゃ仕方ねえな！オレも残るぜ、刹那」

「ロックオン…」

「僕も戦うよ、刹那」

「私もよ。ソーマもそう言ってくれてる」

「アレルヤ、マリー…」



「私も残るです！私も、こんな地球を見て何もしないなんてできません！」

「そうだな！良く言ったぞ、ミレイナ！」

「イアン、ミレイナ……」

「ふう……。対BETA用の戦術プランを考えなくちゃね」

「なあに、オレも手伝うぜ、スメラギさん」

「刹那、私も手伝う。戦闘だとサポートぐらいしか役に立てないけど、刹那の帰る場所を守るよ！」

「スメラギ、ラッセ、フェルト……」

ソレスタルビーイングの、仲間の暖かな心に触れ、刹那は一瞬安心したように顔を綻ばせるとすぐに顔を引き締めた。

「では行こう！助けを求める地球に！！」

「……了解！！！！」

） 日本海 佐渡島 （

甲21号作戦が開始されてから十時間。作戦は最終局面を迎えていた。

XG-70b 凄乃皇式の荷電粒子砲により、佐渡島ハイヴの地表構造物は木っ端微塵に吹き飛ばされた時、それは起こった。

「そ、そんな……！凄乃皇が……純夏が……！！」

白銀武が乗るTYPE-94不知火は、ムアコック・レヒテ機関を停止させて沈黙してしまった。凄乃皇を見上げたままで、固まっていた。

あまりの事態に、精鋭部隊である伊隅ヴァルキリーズも反応ができずに固まってしまっていた。

『ッ！？ヴァルキリーズマムより各機！！エコー部隊のシャーク中隊がBETAの地下侵攻を確認。出現予測地点は………凄乃皇の手前三十km！』

『！？……了解した！ヴァルキリーズ1より全機！私と白銀はこれより、凄乃皇のメインコンピューターを確保する。その間、BETAの足止めをしろ！部隊の指揮は速瀬に任せる。いいな！？』

『り、了解！！』

ヴァルキリーズは水月の指示を受け、楔アロヘット・ツィ式型でBETAの出現予測地点まで向かう。…が

『ッ！？BETA群、ヴァルキリーズ2達とは逆方向から出現！！数は………計測不能！どんどん増えてます！！』

凄乃皇の南十km地点に、BETAが出現したことで状況は最悪になった。

途中で枝分かれしたのだろう。同じタイミングで水月達の地点にもBETAが現れ、迎撃するしかなく退くに退けない状態に。

凄乃皇と伊隅ヴァルキリーズは、窮地に立たされることとなった。

「クツソオオオオ！！やらせるかアアアアア！！」

『白銀！？』

「大尉は純夏を頼みます！！俺が時間を稼いでいる間に、早く！

！！」

みちる機から突撃砲をひつたくり、両手に構えて厚い弾幕を張る。武の驚異的な技量とX M 3により、硬直時間をカットした動きでB E T Aの侵攻を鈍らせた。だが…

「クソツ！弾切れ！？」

たった一人で抑え、しかも盛大に突撃を撃っていたのだ、弾薬がすぐに切れてしまった。後ろに座礁している淒乃皇は動かず、水月達も迎撃に精一杯で動けない。最後の120?を撃ち、弾は完全に切れてしまった。

(純夏…！)

突撃砲を投げ捨て、少しでもと小型種を押しつぶす。長刀と短刀を装備させて応戦するも、突撃砲が無いせいで小型種は素通りになっってしまった。なんとか戦車級だけでも、と淒乃皇目掛けて突撃する戦車級に短刀を振るおうとして、隙ができてしまった。

「よしっ…！！…っ、しまっ…！！」

戦車級を切り裂き、再び不知火を正面に戻すと要撃級の豪腕が目の前に…。

(やられる！)

207小隊の仲間の悲痛な悲鳴が聞こえるなか、目だけは逸らさない。要撃級を睨み付ける。

豪腕が当たると思った瞬間、要撃級がピンクの光に包まれ消滅した。

「な、何が起こったんだ!？」

遠くを見れば、その現象は至るところで見受けられる。リーダーでも、画面が今までに無いほど荒れながらも間隔を置いてBETAの反応が次々と消えていつているのを表示していた。少しでも状況を把握しようとカメラを最大望遠にすると…

要塞級は頭を的確に撃ち抜かれ地に伏せられ

重光線級の群れには無数のミサイルと光弾が降り注ぎ

撤退中の戦術機部隊を追うBETAの一団には、極太の光が放たれ大小の種類に関係なく焼き払われる。

そんな光景が飛び込んできた。

そして、目の前に降り立った青と白の機体は、両手に剣を握り、踊るように突撃級を外殻ごと切り裂き、無数の光弾で何体もの要撃級を纏めて葬り去っていく。

『そこ…機体!…やく離…つしろ!!』

ザーザーとノイズが走った通信ウィンドウが開き、一人の青年が映し出される。

「アンタは、一体…?」

『俺…ちは、機動兵器ガン…ムで戦う私設…装組織、ソレスタルビーイングだ!!』

二本の剣・GNソード? - を腰に戻し、あれだけの大群のBETAを一掃した機体 - ダブルオーライザーはこちらを振り向き、そう告げた。

### 第三話

） 衛星軌道上 ）

ガンダム四機を発進させた後、スメラギはハッキングした帝国軍の艦艇から戦況を眺めていた。

プトレマイオスが軌道に着いたのがだいたい数十分前。ガンダム四機と一機の活躍により、BETAの排除は想定以上のペースで進行していた。

「ケルデイル、地表にいる要塞級の殲滅を完了。第二フェイズへ移行します」

「GNアーチャー、アリオス、二機とも光線級の殲滅完了です！流石ですねえ」

報告を聞きながらも、一瞬たりとも戦況データから目を離さないスメラギ。だがそれも、残りの刹那とティエリアの活躍を聞くまでであった。

「ふう……。どうやら、取り越し苦労だったみたいね。ラッセ、光線級が出る前に降下するわよ！」

「りょーかい！！しっかり捕まってるよ！！」

トレミーは、GNフィールドを展開すると降下を開始した。

） 時は戻り第二話最後 ）

『アーチャーアリオス、目標を殲滅する！』

いち早く四機の中から飛び出したアレルヤは、GNアーチャーのミサイルを発射し、光線級のレーザー照射を攪乱させる。

『ケルデイル、目標を狙い撃つぜー！』

『ターゲット ロック！ロック！』

そしてレーザーが拡散したのを確認したケルデイルはGNフィールドの出力を落とし、火力に回す。狙撃特化の射程を活かし、遠距離から最も巨大な要塞級を狙撃した。一発一発が確実に要塞級の頭を貫き、ついでとばかりに腹まで貫いて絶命させていく。

ガンダム四機はGNフィールドを張りレーザーを弾きながら、降下し続け、ある程度降下すると、四機はそれぞれ違う方向に向かって飛び去っていった。

） side アレルヤ ）

アーチャーアリオスは、持ち前の機動性を発揮して光線級のレーザーを回避しながらツインビームライフルで次々とBETAを焼き殺していく。

ビームサブマシンガンの火力不足を補いながらも連射力を高めたビームライフルは、重光線級だろうと容赦なく殺していった。

「こちらアレルヤ、光線級の殲滅に成功、第二フェイズへ移行します。行くよ、ソーマー!!」

『言われなくとも!!』

一撃離脱戦法で光線級を潰し、制空権を確保したところでGNアーチャーと分離。撤退中の部隊を援護を開始した。

「このツ！当たれエエエ!!」

両手に保持したGNツインビームライフルと腕に埋め込まれたGNサブマシンガンのトリガーを引き続ける。ビームライフルが突撃級の堅い外殻に大穴を開け、サブマシンガンが戦車級や闘士級の群れを焼き尽くしていった。

『はあああ ツ!!』

マリーことソーマ・ピリスはビームライフルとビームサーベルを使い分け、撃震や不知火に取り付いた戦車級を削り取っている。お陰で、既に二個小隊が救われていた。

「ソーマー！そっちが片付いたら一度ドッキングを！GN粒子をチャージしたら、こいつらを一気に押し返す!!」

『了解！よし、行くぞ!』

合図と共に、ツインビームライフルだけは撃ちながら空中に飛び上がり、GNアーチャーとドッキングする。チャージしている間も、BEETAの上を行き来しながらミサイルとビームで個体数を減らしていく。

『80…90…100!!アレルヤ!』

「了解!ドッキング解除!」

GNアーチャーを切り離すと、すぐにモビルスーツ形態に移行。体を一回転させ、モビルアーマーに変形すると撤退中の部隊とGNアーチャーに合流した。

「そちらの部隊!後退までの時間はこちらで稼ぎます!急いで後退を!」

『あ、ああ…。すまない!』

隊長機と思われる不知火は、すまなそうに謝りながら後退を開始した。

「行ったか。……じゃあやるぜエ、ソーマ!」

「ハレルヤか…。わかった、行くぞ!」

二人は土煙を上げながら接近してくるBETAに銃口を向け、引き金を引いた。

side ロックオン

「よし、レーザーが止んだ!ハロ、ライフルビット射出!要塞級をロックしろ!」

『了解! 了解!』



ケルディムは、追い縋るレーザーを細かい機動制御とGNフィールドで流しながら狙撃を続けていた。が、アレルヤが光線級を殲滅したタイミングでライフルビットを展開。一気に殲滅準備に取りかかる。

「マルチロック完了…GN粒子チャージ…よし！ロックオン・ストラトス、目標を狙い撃つ…！」

ロックオンの腕と八口のサポートにより、七基のライフルビットとGNスナイパーライフル？は全て一発で要塞級を地に沈めていく。元々個体数が少なかった要塞級は、ものの数分で全滅してしまった。

「呆気ないモンだねえ…つと、八口！あの部隊を援護するぞ！

シールドビット展開！」

『シールドビット展開！ シールドビット展開！』

『お、お前は！？』

ロックオンはシールドビットを要塞級の腕の前に移動させ、攻撃を受けていた陽炎を後退させる。

「喋ってる暇があるなら撃ちまくれ！俺の機体は多対一には向いてないんでね、撃ち漏らしは頼んだぜ！」

そう言うと、ケルディムはGNスナイパーライフルを格納し、両手にGNビームピストルを装備。ライフルビットと共に迎撃を開始した。

side ????

「電波障害、いまだ直らず！」

「な、謎の飛翔体、各戦線を押し上げていきます！」

「撤退中のシャーク、ベルガー、ライト中隊、補給地点まで後退完了。補給完了次第戦線に復帰します」

「……香月副司令、あの機体は一体……？」

「……………」

国連軍横浜基地の副司令である香月夕呼は、目の前で起こっている事態に、無言でしか返すことができなかった。

事の始まりは、丁度XG - 70b 凄乃皇式型が機能不全に陥った時だった。

「XG - 70b、ムアコック・レヒテ機関沈黙！ラザフォード・フィールド消滅しました！」

「システムチェック急いで！それからヴァルキリーズの伊隅に連絡。非常コード303！」

「副司令！シャーク中隊がBETAの地下侵攻を感知したと報告が……！」

地表構造物を一撃で吹き飛ばした凄乃皇の故障。これに司令部は混乱状態になっていた。

そしてそれに追い討ちをかけるようなBETA侵攻の報告。まさに混沌としていた。

「な、なに…これ？」

その時、ハイヴ突入部隊の再突入殻リメントリー・シエルをレーダーで確認していた通信士が、レーザーに異常な物体を四つ、見つけたのだった。

「か、艦長！正体不明の物体が大気圏を抜けて佐渡島に向かっていきます！！」

「何だと！？再突入型駆逐艦ではないのか！？」

「違います！ツ！レーザー照射警報：降下中の四つに向かってレーザー照射開始されました！！」

それは、戦艦の艦橋からでも確認できた。こちらの砲弾を迎撃した時以上のレーザーが上空に向かって放たれる光景は、幻想的だった。

「う、ウソ……あり得ない……！」

未だにレーダーから目を離さない通信士を不信に思い、副長が通信士の肩を掴む。

「おい、何をぼんやりとしている！戦闘中なのだぞ……！」

「だ、だって……まだ……ツ……！」

またしてもレーザー照射警報が鳴り響いた。しかしレーザーは、未だに上空に向けて放たれていたのだ。艦橋にいた全員、なぜ通信士がレーダーから目を離していないのか理解した。

「どういうこと……？まさか、レーダーが外れたの？」

「ち、違います、香月副司令！レーザーは命中しました！おかしいのはあの四つです！！あれだけのレーザーを受けても質量が変わっていないんです……！！」

「何ですって……ッ!？」

「こ、今度は何!？」

レーザーが止んだ途端、今度は単発的に警報が鳴ったのだ。そして直後、地上にいた要塞級の頭部に大穴が開いた。

一瞬びくつ、と震えるように動くと、その巨体が崩れ落ちる。

警報が鳴る度にそれは起き、要塞級の近くで戦闘をしていた部隊からは確認の通信が押し寄せた。

「謎のレーザーは、降下中の一つから発射されています。もう直、目視可能地点まで降下します!」

「カメラ回して!最大望遠!!」

夕呼の指示でカメラが旋回。メインモニターに映像が入る。

「…翠色と橙色の…流星?」

「み、翠色の一つが急加速!!凄まじい速度で地上に降下中!!」

「兵器だったのか!?!しかも特攻!?!」

急降下中の一機に、カメラが照準を合わせる。先程よりも大きく映り、翠色の何かで包まれた戦闘機ということがわかった。

その戦闘機は、機体後部から大量のミサイルを発射した。ミサイルは発射された瞬間機体を中心とした円形に散らばり、レーザーはミサイルを追いかけて戦闘機を素通りさせた。

更に接近した機体は、機首と思われる部分からビームを乱れ撃ちした。

たったそれだけで、その地域に存在していた光線級の全てが蒸発。直後、戦闘機は翠色のフィールドを消し、更なる機動性を発揮して光線級の殲滅を完了させた。

「……こ、光線属種、全滅……！」

「えっ！？こ、降下中の物体から戦術機出現！！多数の飛翔体を射出し、要塞級を狙っていきます……！」

「戦術機、二機に分離：戦術機に変形しました！もう何がなんだか……！」

「橙色の球体、フィールドを維持したままハイヴ内に突入！」

「最後の翠色が凄乃皇に接近！そのまま凄乃皇周辺のBETAに攻撃を開始……！」

「っ！？各部隊との通信が途切れつつあります！レーダーも一部使用不能に……！」

そうして、冒頭に戻る。各戦線は、たった三機の介入によって押し上げられていた。

「……………」

「こ、香月副司令！今度は戦艦クラスの物体が降下中です！しかも戦艦クラスのアンノウンから副司令宛に通信が……！」

「……………繋いで頂戴」

指示に従った通信士は、コンソールを操作し、通信をメインモニターに繋げた。

艦橋にいる全員が緊張しているなか、通信が繋がった。

## 第四話 修正

side ヴァルキリーズ&刹那

武の不知火と刹那のダブルオーライザーは、遠くから砲撃と銃声が響く中で向き合ったまま固まっていた。そして、次に口を開いたのは武だった。

「ソレスタル……ビーイング？っていつか今の機体、ガンダムじゃ……あつ、待てコラ！何処行くんだよ！？」

「反対側だ。こちら側のBETAは排除したからな。お前はここに居てくれ」

「あ、おい！クソツ、何なんだよ一体……そ、そうだ、純夏アアア！」

武はガンダムの事など忘れ、凄乃皇に向かうのだった。

そして当初、凄乃皇の方に向かってくと予測されたBETAの迎撃に向かっていた速瀬達は、苦境に立たされていた。衛士一人一人の力量に問題はなくても、疲労や弾薬の問題など色々と無理が祟ってきたのだ。

「チツ！！宗像、左の要撃級は任せた！」

『了解！』

短い通信で指示を出しながら、水月は長刀を振るい突撃級を物言わぬ…もとい動かぬ肉塊に変えていく。既に長刀の一本は真つ二つに折れ、予備のもう一本もそろそろ危ないかもしれない。

既にヴァルキリーズの合計キル数は二千を越えていた。弾薬も尽きかけ、撤退しないと部隊全滅の危険性まで上がってきた。

「くっ…！茜、弾薬は！？」

「これが最後の弾倉です…！」

「…御剣、珠瀬。あんた達はを率いて補給に後ろに下がって補給コンテナを持ってきなさい…！それまで保たせるから、なるべく急いで…！」

『『り、了解…！』『』』

『速瀬中尉、危ない…！』

「しまっ…！」

指示を飛ばして操縦が疎かになっていたようだ。その間に、要撃級の一体が背後に立っていて、いくらXM3でも対応しきれない。

腕は既に振り上げられており、後方から袴子が狙撃をしようにも射線が重なっていて撃つことができない。

ヴァルキリーズの悲鳴を聞きながら、水月は思い人を頭に浮かべた。

（孝之…！）

『うおおおおお…！！』

ズバアアアアア！！

突如、袴子達より遙か後方から放たれたピンクのビームが要撃級

を呑み込んだ。いきなり目に飛び込んできた閃光に、目を細める。そして光りが止むと、そこにいたはずの要撃級はクレーターをのこして吹き飛んでいた。

ビームはそれだけでは終わらず、何発も放たれて後続のBETAを呑み込み続けた。

「ッ！」

脅威が無くなったのを確認した水月は、すぐさま機体を後ろに下げ、隣に降りてきた青と白の機体　ダブルオーライザーに通信を入れた。

「ひとまず礼は言っとくわ！ありがとね」

『気にするな。それよりも、来るぞ！』

刹那の言う通り、既に先程倒したBETAを上回る数のBETAが姿を現し、こちらに突撃しているところだった。

「そうね。アンタ名前は？」

『刹那・F・セイエイだ』

「刹那か。んじゃ刹那、いきなりだけど私と二機エレメント編成組んでもらうわよ！いい！？」

『了解した！ダブルオーライザー、刹那・F・セイエイ。目標を駆逐する！！』

水月は長刀を構え、刹那はGNソード改をライフルモードとソードモードにして握る。そして二機は、BETAに同時に斬りかかった。



） side ティエリア ）  
「圧縮粒子、解放！クアッドキャノン！！」

単機ハイヴに突入したティエリアの操るセラヴィー「T」は、邪魔な壁をビームで焼き崩しながら反応炉に向かっていった。

「既に地下千五百メートル…。そろそろ反応炉に着く筈なのだが…」

そう言いながら、機体に群がる戦車級をGNフィールドで焼き殺す。既にティエリアの総キル数は、ヴァルキリーズを大きく越え、五千体にも及ぶ。密閉空間で放たれるセラヴィーの強力なビームだからこそその戦果と言えた。

「二千メートル…まだなのか？」

ティエリアがそう呟いた瞬間、セラヴィーはとてつもなく広い空間に出た。

青白い不気味な光は一層強くなり、空間の中心にはゴツゴツと瘤のような物が付いた岩が鎮座している。

「見つけた！あれが反応炉か！…《刹那！！》」

「テイエリアか？見つけたのか！！」

刹那は、群がる要撃級を前腕ごと切り裂き地に沈めた。

『刹那、どうか、した！？』

同じく長刀で要撃級を切り伏せた水月は、突然喋り出した刹那に通信を入れた。

「ああ。仲間が反応炉の場所を捉えた！今から反応炉の破壊任務に移る！ここは任せるぞ、水月！」

『わ、わかったわよ。ってかどうやって反応炉を破壊すんのよ！？』

「見ていればわかる」

そう言い残すと、刹那は上空に飛び上がり地表構造物跡に向かった。

「アレルヤ！武装コンテナからGNソード？を！」

『アア！？……刹那か。了解した。今ちよつと動けないから、自分で出してね』

「了解！」

刹那はビームを撃ち続けているアリオスの後ろに回ると、ミサイルコンテナに無理矢理くっ付けられていた武装コンテナを剥ぎ取った。

拘束具は爆発ボルトで弾け飛び、刹那はコンテナを地上に置くと中身を取り出した。

刃の部分が翠色の半透明な鉱物で出来た剣、GNソード？だ。

刹那は、GNソード？改を腰にマウントすると、GNソード？を右手に装備する。

『ソレを装備したってことは、反応炉を破壊するんだね？』

「ああ。ティエリアが座標を特定したからな」

『わかった。あ、トレミーが降下してくるね』

アレルヤの言う通り、遙か上空にプトレマイオスの巨大な船体がGNフィールドに包まれて降下してきていた。

「そうか。フェルト、聞こえるか！」

『刹那？は…聞こえます。どうか…ましたか？』

「今から反応炉を破壊する。スメラギに伝えてくれ」

『了解しました！』

トレミーと通信を切ると、刹那は地表構造物跡上空に向かった。

『さて。仕上げと行くよ、ハレルヤ、ソーマ！トランザム！！』

『おや？もう反応炉潰すのか。ならこっちも……トランザム！！』

『今地表に出た！セラヴィー、佐渡島北部に展開するBETA群を排除する。トランザム！！』

スメラギのプランは、こういう物だった。

まず、アレルヤのアーチャーアリオスで地上の光線属種を殲滅。次に、狙撃で一番的が大きい要塞級をケルデームが攻撃。二機とも殲滅が完了次第地上に降り、手数が多い武器で帝国軍を援護。防御力、攻撃力が一番高いセラヴィーが単機でハイヴに突入し、反応炉の位置を調べる。刹那は反応炉が見つかるまでオルタネイテイブ4のヴァルキリーズの援護。そして反応炉が発見したら、アリオスに無理矢理搭載したGNソード？をダブルオーライザーが装備、反応炉を破壊する。反応炉が破壊されるまでに、残りのガンダム三機はトランザムで地上に残ったBETAの殲滅。

これがスメラギの考えたミッションプランだ。

アリオスは威力、密度共に上昇した弾幕で、遠距離のBETAまで削る。

ケルデームは、今使える全ての演算装置を使い、ライフルピットをより早く操りBETAを貫く。

セラヴィーは、ヘビーウェポンを含めた六門のビーム砲を同時に放ち、BETAの海を蒸発させていく。

そして、刹那の駆るダブルオーライザーは…

『GNドライブ同調中！ 同調中！』

『後少シ！ 後少シ！』

搭乗者のいないオーライザーのコックピットに、臨時として赤八口と青八口を乗せて、GNドライブを調整しているのだ。

『GNドライブ 同調完了！！ 完了！！』

「よし、行くぞ！圧縮粒子解放！トランザム……ライザーソード

！！」

ダブルオーライザーの装甲は紅く輝き、肩のGNドライブからは大量のGN粒子が散布される。空に巨大な00を描くと、刹那はGNソードを反応炉に向けて突き出す。

ダブルオーの目が一際輝き、ライザーソードがハイヴを貫いた。

最初、地上にいた兵士には巨大なビームとしか見えなかった。だが、そのビームが地面を切り裂き、天高くそびえたつ柱を見て、それが剣だとわかった。

反応炉は一瞬で溶け消え、佐渡島ハイヴは攻略された。

## 第四話 修正（後書き）

さて、次はマッドと酒飲みの対談です。……なんかどんな展開になるか凄まじく不安…？

第五話 (遅れながらの大修正) (前書き)

おやっさんが壊れました…。

## 第五話 (遅れながらの大修正)

夕呼

「……………」

ブリッジクルーは、軒並み驚愕の表情で固まっていた。スメラギと名乗った女性の言う通り、ハイヴが攻略されてしまったからだ。

『信じていただけましたか、香月博士？我々に敵対の意思はない、と』

「…………ええ。あれだけの力があつたなら、私達の軍なんて手も足も出ないでしょうからね…！」

『では、私達はこれから別のハイヴの攻略に向かわせていただきます。何かありましたら、通信用にサポートロボの八口を一台お送りしますので、そちらを使ってくださいな』

「…わかつたわ。そしてそちらの条件、横浜基地の一部施設の貸与、も、ね」

『ありがとうございます、博士のご協力に感謝を。フェルト、全マイスターに連絡。急いで帰投するよう伝えて頂戴』

最後にトレミー側のやり取りが入ったが、そこで通信が途切れた。夕呼を見ると、その表情は俯いていてよくわからない。怒りを押し込めているのか、はたまた悔しさを我慢しているのか…。

「…………作戦を最終段階に移行する。各部隊は残存BETAの掃討とハイヴ内の搜索を開始せよ」

「…了解！HQよりウィスキー、エコー部隊。作戦を最終段階へ移行せよ。繰り返す……………」



固まったまま動かない夕呼の代わりに艦長の男が指示を出す。  
被害が最小限に抑えられたとはいえ、帝国軍の雰囲気は何処か重  
苦しかった。

） side 武 ）

「な…んだよ、あの馬鹿デカイビームサーベルは…!!」

武は純夏を助けだした後、みちると共に戦術機母艦に向かって帰投している最中だった。離れていて、しかも不知火の管制ユニットの中にいてもダブルオーの放ったライザーソードは眩しく目に焼き付いた。

ひとまず外の風景から視線を00ユニットとなった純夏に移す。目蓋は重く閉ざされていて、未だに目覚めることがない。

「…うつ…あう…」

「純夏!? 純夏!!」

なんと、純夏が突然目覚めたのだ。そして気づく。いつの間にか周囲をキラキラとした光の粒が舞っていたのだ。

「…あれ? 武…ちゃん? 私、なんでここに…」

「それより…それよりお前は何ともないんだな!? な!?」

「う…ん。まだ…ODLの劣化が残ってるけど、あの…翠色の光の…お陰で…楽になったよ…」

弱々しく笑う純夏は、確かにまだつらそうであった。

「そうか…でも良かった…お前が無事で…本当に…！」

武は、涙を流しながら純夏を抱き締めた。

） side 刹那 ）

「な、何だ…今の感覚は…！」

刹那は、トランザムを起動した事で起こった共鳴現象で、何かを感じた。

それはとても暗く、粘り着くタールのような感触を持った感情だった。しかし、反応炉を貫いた途端、それは初めから存在しなかつたみたいに消え失せたのだ。

「勘違い…いや、違う！何なんだ、一体！」

『刹那、どうかしたの？トレミーへの帰還命令はでた筈だけど…』  
「…いや、すまない。今帰還する」

刹那は頭を振ると、機体をトレミーに向け発進させた。

世界 各国の軍は、ソレスタルビーイングの登場により震撼した。たったの四機の参入で、崩壊し掛かっていた戦線は立て直され、しかも作戦を成功させてしまったのだ。

アメリカは帝国政府に強く説明を求めたが、答えは無く、その間にもソレスタルビーイングの介入は続いていく…。

） 甲20号鉄原ハイヴ ）

佐渡島ハイヴが攻略されてから数時間。トレミーは、佐渡島ハイヴから最も近い、鉄原ハイヴ付近に接近していた。

「さてみんな、ミッションプランを説明するわ」

トレミーのブリッジに集められた全クルーは、モニターに映された鉄原ハイヴを眺めていた。

「今回は、佐渡島ハイヴのより難しくなるはずだわ。佐渡島では帝国軍がA1砲弾で重金属雲を作っていたから、そこまでレーザーは来なかったのだけれど、今回は重金属雲が無い以上全てが来ると思っ頂戴」

「そこで、今回は上空からの侵入は無し。地上からの侵攻とします」

まず、トレミーが潜んでいる海底付近から青い線が三つ進み、間隔を空けながら上陸した。

「私の予測では、BETAはこの時代でも高度な電子機器を搭載したガンダムに気付いて動き出すことがあっても内陸部に入らない限りこちらには攻めてこないはず。だから、各マイスターはBETAに遭遇次第戦闘を開始して頂戴。あと、できる限りBETAは殲滅してね。情報だと、BETAは住んでいたハイヴが破壊されると、近くのハイヴに戻る習性があるみたいだから。わかった？じゃあ、ティエリア以外のマイスターは出撃準備！」

「了解！」

「ま、待て！何故僕は残らなければならないんだ！？」

他のマイスターは事情を知っているのか、スタスタとブリッジを後にする。

すると、今まで壁にもたれながら空気と化していたイアンが、口を開いた。

「…ティエリア。お前さん、今のセラヴィーがイノベーター製の擬似太陽炉を使っているのは知ってるよな？」

しゃべる毎にイアンは俯き、怒りとも何とも呼べない黒いオーラを出し始める。これには、娘のミレイナはもちろん、ブリッジに残った全員が下がるほどだった。

「あ、ああ。ガガタイプの物を大量に接收したから、それは聞いているが…」

「……なら、イノベーター製の太陽炉はトランザムを起動してGNコンデンサー内のGN粒子を使い切ると焼ききれるのも？」

「あ……………」

「あ、って何だ！ティエリア、補給はできても手間が掛かるし、擬似太陽炉は造れないんだぞ！？それなのにお前さんは……！！！」

「す、すまない！以後気をつけるから……」

「うるさい！お前さんには一度しっかり話し合わなきゃならんからな……！！」

「ま、待ってくれイアン！うわああああ　　ッ！」

それから作戦開始直後までイアンの説教は続き、ティエリアは予備として積まれていたガガの擬似太陽炉に取り替えてセラヴィーに乗り出撃するのだった。

## 第五話 (遅れながらの大修正) (後書き)

セラヴィーはイノベーター製の擬似GNドライブです。色々な説がありますが、今回はトランザムでGN粒子を使い切ると焼き切れるという設定で行きます。

## 第六話

） 鉄原ハイヴ ）

『ガンダム全機、海岸線まで到着しました』

『それじゃあみんな、ミッションスタートよ！』

「「「「了解！！」「」「」」

スメラギの合図と共に、ガンダム四機は海面から飛び上がった。四機はすぐに高度を落とし、アリオスはGNアーチャーを分離させる。

地表に出てから一分弱。すぐにBETAが現れた。

遙か前方の彼方から土煙を上げて来る突撃級。だが、突撃級の群れはテイエリアの一撃で跡形もなく吹き飛ばされた。

「セラヴィー、突撃級を排除する！」

四門のGNキャノンと二門のGNバズーカ2を構えた一斉掃射。クアドキャノンとも呼ばれるこの一撃は、突撃級の九割を削り取った。だが、残った十数体の突撃級はそれでも走るのを止めず、近づいてくる。

それに止めを刺したのはロックオンだった。

七基のライフルビットとGNスナイパーライフル2により、頑強な外殻ごと焼き殺されたのだ。

「呆気ないねえ。やっぱ、奴等は物量だけしか取り柄が無いから…」  
「油断は禁物だよ、ロックオン。その物量が一番の問題なんだか

ら

長距離用のビーム砲を撃ちながら、アレルヤが注意する。いくらガンダムでも、あの質量の中に流されれば損傷は免れないからだ。

「…そつだぞロックオン。これ以上機体を傷つけるわけにはいかないんだ」

そう言いながら、オレンジ色のビームを連射するティエリア。距離が離れているにも関わらず、その威力は絶大であった。

「へいへい。わかってますよ！刹那、準備はいいか？」

「問題ない。行くぞ！トランザム！！」

刹那はダブルオーライザーを一步前に出し、トランザムを起動させた。装甲は紅く輝き、放出する粒子量が勢いをそのままに安定し始めた。

『GNドライブ 調整完了！ 調整完了！』

「よし…ライザーソー…！？」

赤八口の合図と共に、ライザーソードを放とうとした刹那は、頭に入ってきた‘何か’に酷い頭痛を覚えたのだ。

こちらの都合などお構い無しに入り込んでくる‘何か’に、刹那はライザーソードを放てず頭痛に苦しむ。

「うあッ！！が…ッ！…アアア！！」

「刹那！？」

「ティエリア、一体何が！？」

「……………聞こえた！下だ、下に人間だった者がいるんだ！！」



テイエリアが瞳を輝かせながら苦し気に言う。純粹種のイノベーターより低い脳量子波であっても、かなり辛いようだ。

「人間…だった…？」

「ああ。奴等は、その星にいる生物を基に、BETAを作っていたんだ。恐らく、今まで倒したBETAも…」

「うああアア　　ッ！！」

刹那は何かを振り切るように叫ぶと、ライザーソードで地表を風ぎ払った。

巨大なビームサーベルは地表構造物を意図も容易く切り裂き、地上に出ていた数十万規模のBETA諸とも蒸発させた。

「ハア…！ハア…！ハア…！」

「おい刹那、大丈夫か！？」

「ハア…ハア…！問題…ない、ミッションプラン…通り、地上の…撃ち溢しを…叩く…！」

ダブルオーは一瞬ふらついたが、直ぐに態勢を立て直し、新たに沸き出し始めたBETAの駆除に向かう。

それを見たマイスター全員は顔を見合わせると、同時に頷きGNアーチャー以外が壊れた地表構造物から内部に侵入した。

テイエリアが邪魔な壁をクアドキャノンで溶かし、その隙をケルデムとアリオスがカバーする。

作戦開始から三十分。反応炉はアリオスのGNミサイルの嵐で破壊され、ミッションプランを大幅に短縮して終わるのだった。

） プトレマイオス2 ）

ガンダム全機が帰還してすぐ、刹那は倒れ医務室で眠ってしまった。

フェルトはその報せを聞いた途端、居てもたってもいられない、とばかりにブリッジを飛び出し、今は刹那を看病している。

そして今、刹那とフェルトを除いた全員がブリーフィングルームに招集され、緊急会議が開かれていた。

「…さて。ティエリア、刹那が何故倒れたか…説明して頂戴」  
「わかっている」

そう言い、もたれていた壁から離れると、コンソールを弄り床にBETAの 兵士級の映像を映し出させた。

「この兵士級というBETAは、近年になって確認された最も新しい種だ。ロックオン達は戦闘中に聞いたかもしれないが…」

「おいおいおい、まさか人‘だった’ものつてのは…」

「その兵士級だといつかい!？」

「…認めたくないが、その通りだ。兵士級には生きた人間も死んだ人間も使われたようだ。だから、思念を発する個体とそうでない個体がいたのだろう」

「…ちなみに、兵士級に変えられた人は、何て言ってたんだい？」

おずおずと、言いにくそうに聞くアレルヤ。ティエリアは一度息

を吐くと、語り始めた。

「……怨み、憎しみ、悲しみ……そういった負の感情しか見られな  
いかった。中には殺してくれ、という声も聞こえたが、ほとんどは  
意味を成さない叫びだ。それを刹那は直接、しかもより多く聞いた  
んだ。倒れても仕方ない」

その内容に、ブリーフィングルームには重苦しい空気が漂った。

「……ひとまず、刹那が倒れたのは過労のような物で、暫く休めば  
起きるだろう」

「わかったわ。ありがとう、ティエリア。……ではこれより、本  
艦は日本の国連軍横浜基地へ向かいます。理由はもちろん、これ以  
上のハイヴ攻略は危険だからよ。二十分後に発進します。それまで  
に各員、持ち場に着いていること！以上、解散！」

スメラギはそう言うと、ブリーフィングルームを後にした。

） 横浜基地 （

一方、横浜基地に帰還した武は、戦場で見たガンダムの事を報告  
するため、夕呼の執務室に向かっていた。

今回、ヴァルキリーの損耗は奇跡的に0であった。淩乃皇は未  
だに佐渡島だが、何時かは爆破するなり解体するなりで処分するそ  
うだ。

「夕呼先生！！……つて、あれ？先生……？」

武が執務室に飛び込むと、そこには霞に毛布を掛けられながら眠る夕呼の姿があった。

霞は、武を一瞥すると執務室から出ていく。その際、武には霞がむくれている様に見えたが、気にしないことにした。

「あちゃー、すっかり寝ちまつてる。こりゃ明日じゃなきゃ無理だな……。一応報告書ぐらい書いてくか」

そう呟き、武も執務室を後にする。

「……とんでも……兵器……バカに……」

誰もいなくなった執務室に、夕呼の寝言だけが虚しく響くのだった。

## 第六話（後書き）

ちよつと劇場版に似た気がするようないやないやうな……？

## 第七話（前書き）

連投なんて何ヶ月ぶりでしょう…。

読者様から様々な穴を指摘いただき、説明をば…

Q1、GN粒子があるのにレーザーとか通信使えてるよ？

はい。言われるまですっかり忘れてました。答えは感想の返信に書きましたので、そちらをご確認してもらえれば…

Q2、ダブルオーのGNソードの種類がわからない

はい。ケータイで書いているため、何故か更新すると消えてしまうのです。パソコンだと大丈夫なんですが、パソコンが帰ってこない等の諸事情で、今は1、2とかくことにしました。

と、こんな具合です。Q2はパソコンが戻り次第直ります。

では、第七話スタートです！

## 第七話

） P X ）

「おはよう、白銀君。昨日聞いてきた報告書、ちゃんと書けた？」

「おはようございます、涼宮中尉。出来は微妙ですけど、書けたには書けました！」

朝。昨日の夜、武は急いでP Xに戻り水月達と話していた遙に、報告書の書き方を聞きに行ったのだ。

初めはその場にいた全員に驚かれたけど、何とか基本的な事を教えてもらった。…酔った水月に絡まれたが。

それさえなければもっと眠れたな、と考えながら、武はP Xで朝食を取るのだった。

朝食後。武は報告書片手に夕呼の執務室に向かっていた。一応、イリーナ中尉に連絡してもらったから昨日のようなことは無い…筈だ。

「失礼します、白銀です」

『入りなさい』

執務室に入れば、夕呼はいつも通りデスクに座って仕事をして

いた。こちらをチラリと見ると、PCを操作し終え席をたった。

「…さて。白銀、昨日の機体のことで報告があるって聞いたけど、報告書はいいから話しなさい」

「うっ！せ、せめて目を通してくれても……わかりました。まず、俺の世界は戦争は何もない、平和な世界だ、つて前にも言いましたよね？」

「ええ。確かに。戦術機のようなロボットが欠片も無い、ともね」

「はい。これには俺も、凄く驚きました。あの機体　ガンダムタイプは、俺の世界ではアニメやマンガとして知られていたんです」

「ガンダム、タイプ……」

「はい。二対の瞳にV字アンテナ。人間の顔に似た作りをした機体は、総称としてガンダムタイプと呼ばれていました」

「…アンタは、あの四…いえ、五機に覚えはあるの？」

「…いえ、無いです。只、あれがガンダムだというのは確かです！ピンク色のビームにビームサーベル、間違いないんです！！」

武がそこまで言うと、夕呼は報告書を見始めた。ペラペラと捲りながら、真剣に読んでいく。

何となく居心地の悪くなった武は、まだかまだかと夕呼が読み終わるのを待っている。

「……………大体わかったわ」

「え…？」

「とにかく、ガンダムタイプはその時代の最先端技術を惜しみもなく使った高価なワンオフ…という事でしょう？」

「は、はい。確かにそうですね…」

「何よ、ビーム兵器が基本装備？バカにしてるわけ？しかも向



こうが送りつけてきたハ口とかいうのは解析できないし………！」

段々雲行きが怪しくなってきたのを察知した武は、そろそろと執務室から脱出する。そして執務室を出た途端……

『科学をナメンなアアアアアア……！』

凄まじい怒号と共に、いろんな物が壊される破碎音が聞こえてきた。

そして武は、触らぬ神に祟りなし、と言わんばかりに執務室から逃げ去っていった。

そして数分後、ソレスタルビーイングが横浜基地への寄港を求めた通信が来た途端、基地は大騒ぎで準備を進めるのだった。

〔 横浜基地      H S S T 発着場 〕

広大な滑走路。今はそこを、ソレスタルビーイングの母艦、プロレマイオス2が占拠する形で佇んでいた。

青と白の配色をされた船体は、基地の者にクジラを連想させるのだった。

そして、場所は降り地下。夕呼の執務室には、ソレスタルビーイングの代表としてティエリア・アーデと、一台のハ口が面会をしていた。

対する夕呼側は基地司令のラダビノッド、霞、武、夕呼の四人だ。

いつもは足の踏み場もない執務室も、今日だけは綺麗に片付いている。恐らく、隣にある霞の部屋に押し込んだのだろう。

「…香月副司令、ラダビノッド司令。まずは、こちらの要請通り基地施設の貸与に感謝します」

「気にしなくていいわ。アンタ達のお陰で、被害が減ったのは事実だしね。そうそう、日本帝国の征夷大將軍、煌武院悠陽殿下から感謝状を預かっているわ。後で読んでおいて頂戴」

「了解した。ミス・スメラギ、後は貴女にお任せしてもよろしいか？」

夕呼側は、突然八口に向かって喋り始めたティエリアをかわいそうな眼差しで見た。武は心中、「八口まで居やがった…！」と絶叫していたが、それを知るのは霞一人だけであった。

「…そうね。挨拶も終わった事だし、私の出番ね。お疲れさま、ティエリア」

「そう疲れたわけでもないから気にしなくて構わない。…それより、早く立体映像を出した方が良いと思うぞ？」

『あら、忘れてたわ』

すると、八口の口がぱっ、と開き、立体映像のスメラギが映し出された。

武と霞を除く全員が驚きで固まっている中、その武に興味を持ったのかスメラギが話しかけた。

『あら？そちらの……少尉さんは驚いてないみたいね。意外だ

わ  
』

「…まあ、ガンダムなら何でもアリですからね」

「…？貴様、ガンダムの事を知っているような口ぶりだな」

(チツ！バカ白銀が…ッ！！)

「あ、えと…その…」

あたふたし始めた武に、後でお仕置きを決めた夕呼は、武に更なる質問をぶつけるティエリアを黙ってみる事しかできなかった。

「まさか…我々の世界の住人か！？」

「ち、違う違う！俺は…」

武は確認を取るように夕呼を見ると、勝手にすれば、と言わんばかりに肩をすくめる夕呼の姿があった。

「…ティエリアさんの言う通り、俺は異世界人だ。夕呼先生の因果率量子論の実証体でもあるんだ」

それから武は、自分がいた世界のこと。大まかな歴史、文化を話していく。そして、ガンダムのことを話した途端、二人は一気に脱力した。

『ア、アニメ…』

「ガンダムが…娯楽…？」

「二人がショックを受けるのはわかるけど、事実なんだ。…それで、できればそっちの事も教えて欲しいんだけど、ダメか？」

今の武は、最初と違って好奇心に溢れた目をしていた。世界は違えど、同じ異世界人を前にして興奮しているようだ。

スメラギは問題なし、と判断し、話そうとした瞬間。

ビー！！      ビー！！      ビー！！      ビー！！

横浜基地に警報が鳴り響いた。

## 第七話（後書き）

武は、ターンAまで知ってる設定です。SEEDは2004年です  
から知らないです。

## 第八話（かなり修正）（前書き）

多分今月最後です。

後、作者が来週テストで10月中旬まで更新ができないかと…。

## 第八話（かなり修正）

BETAの地下大侵攻。その報せは、撤退を始めた新潟の防衛ラインからであった。

正確な個体数は計測不能。ただ、センサーで捉えられただけでも、既に五万體以上のBETAが本土の地下を掘り進め、侵攻してきているのだ。

そして、その目標は……甲22号ハイヴ。横浜基地であった。

横浜基地はすぐに防衛態勢を整え、三重にも及ぶ防衛ラインを構築していた。

近隣の帝国軍基地や、斯衛軍にも援軍要請を出し、先の甲21号作戦に参加していた艦隊が海上から支援砲撃をしてくれることとなり、防御態勢は万全と言ってもいい形になる予定だ。

そして、更なる防御ラインの強化のため、ソレスタルビーイングも防衛戦に参加することになるのだった。

急ぎプロレマイオス2に帰還したティエリアは、スメラギによって集められていたマイスター達と作戦会議を始めていた。

「今回、トレミーは基地上空から支援爆撃をする事になったわ。ガンダムは全機とも前線に出て欲しいのだけど…」

「まだ、刹那が目覚まさないの…」

涙目で、目を赤く腫らしたフェルトは掠れた声でそう言う。刹那は、治療ポッドに入ってから時折うなされる以外、全く目覚める気配がないのだ。

「刹那が出られないとなると…戦力はかなり落ちるな」

「いや、今回はオレもモビルスーツで出撃<sup>で</sup>。戦力低下は免れないが、少しは足しになるだろ」

「ラッセが出るのか！なら、少しは大丈夫かな」

「少し、は余計だ！アレルヤ！」

アレルヤとラッセが軽くふざけていると、格納庫のイアンから通信が入りラッセを呼び出した。

『おい、ラッセ！お前さんの依頼通り、ガラムガンダムの調整は完了だ！専用のGNビームサブマシンガンも造っておいたから、後で後部ハッチまで来るんだぞ！』

「よっしゃ！ナイスおやつさん！」

「じゃあ、フェルトは刹那が目覚ますまで近くにいてあげて心配、なんでしょ？」

「は、はい！了解です！！」

「じゃあみんな、BETAの予測到達時間まで六時間。この防衛戦、必ず成功させるのよ！いいわね！？」

「……了解！！」「……」

「では…ミッション、スタート！！」

こうして、ソレスタルビーイングの準備は着々と進むのであつ



た。

） 第一次防衛ライン ）

第一次防衛ラインには、国連軍戦術機機甲部隊が一個大隊、帝国軍戦術機機甲部隊が二個中隊配備され、半円を描くような形で布陣していた。

そしてその上空に、二機のモビルスーツ：アリオスとGNアーチャーがドッキングした状態で飛行していた。

各防衛ラインにはそれぞれ一個大隊36機が配備され、それに加え帝国軍の部隊二個大隊が分散するように散らばっている。

第二次防衛ラインにはテイエリアのセラヴィーとラッセのガルドムガンダム（ソレスタルビーイング改造型）。第三次防衛ライン（最終防衛線とも）にはケルディムが六基のGNライフルビットとシールドビットを展開させ、狙撃態勢で待機しており、背後から奇襲でもされない限り十分対応可能な布陣だった。

そんな中、右翼の最先端にいた黒く塗装された六機のF-15EとF-14Cがこんな通信をしていた。

『ねえ先輩、あれが佐渡島の…？』

『多分な。レーダーの調子が悪いのもアイツ等が原因らしいぜエ？』

ま、データリンクが生きてるから問題ないけどな！……っつかし、見た目からして全然違うなあ…。只の戦闘機にしか見えねえぜ』

『チヨッパー、グリム。無駄口を叩いてる暇があるなら武装のチエツクをしたらどうなの？』

『ナガセの言う通りだぞ、お喋り小僧のチヨッパー』

『ウゲツ！まだそのアダ名で呼ぶのかよ…』

『まだチヨッパーのほうがマシだろ？俺なんて赤ん坊みたいなブービーだ』

『ほお〜う？ブレイズ、お前、俺がつけたコールサインが気に入らないと？』

『え！？あ、いやその…そういう訳じゃ…！』

『ははっ！バートレット大尉、からかうのもその位にしてやりましょう』 『ふっ…そうだな、スノー大尉。…来たな…！』

広範囲に渡る微弱な震動。次々とCPに寄せられる報告で、HQはコード991を発令した。

綺麗な半円型は一瞬その形を揺らすと動きを止め、上空のアリオスとGNアーチャーは分離してモビルスーツ形態になる。その瞬間、チヨッパーとグリムが騒いだ。エッジの冷たい視線で黙らされたのはご愛嬌だ。

そして一瞬、揺れが大きくなったと思った途端、遙か前方の地面が陥没した。

『震動センサーが振り切れた…！隊長…！』

『よおし！全機聞け！そろそろ奴さんのお出ました。サンド島防衛戦（あの時）とは違うんだ。盛大に歓迎してやれ…！』

『了解！アーチャー、交戦…！』

『了解！チヨッパー交戦…！』

『エッジ、交戦…！』

『ブレイズもといブービー、交戦…！』

『ソーズマン、交戦…！』

『ウォードック改めラーズグリーズ、出撃だ！！ハートブレイク・ワン、行くぜ！！イイ ヤツホオオオオ ツ！！！！』

バートレットの雄叫びと共に、漆黒に塗装された四機のF-15Eと二機のF-14Cは戦場のBETAを喰らいに向かった。

「アリオス、迎撃行動を開始する！」

ヘビーウエポンのミサイルコンテナが開き、ブラスト・ガード制圧支援のミサイルを上回る速度でGNミサイルが発射、飛翔する。通常ミサイルが進撃を続けるBETA群にぶつかると対し、GNミサイルはBETAが溢れ出てくる穴に向かって殺到した。

BETAは穴から出ては吹き飛ばされ、一瞬の間隙で穴から這い出したBETAも、ミサイルの余波で死んでいく。

三百発近いミサイルは、光線級に撃ち落とされること無くBETAの寸断に成功したのだった。

「ソーマ・ピリス、目標を破壊する！」

一方、一番最初に地中から飛び出した三千体近いBETAは、第一次防衛ラインで食い止められていた。一番始めにやってくる突撃級は、120mm砲弾で外殻ごと爆ぜ、運良く仲間の死骸が壁になったり外殻で生き残った個体はGNアーチャーのビームラ

イフルとミサイルで潰されていく。

やがて、雨あられと降り注いでいたGNミサイルは止み、その頃には第一波のBETAは完全に殲滅されたのだった。

） 第二次防衛ライン ）

『つかアアア！スゲー震動だなあ！やっぱ実戦は違うぜ…！』

『お前、物好きだな…キャンセラー切ってるのか？』

第一次防衛ラインのミサイルと砲撃の爆発は、遠く離れた第二次防衛ラインからでもはっきりと見える。

そんな中、今回が久しぶりの出撃で浮かれていた二機のF-15

Eは気の抜けた会話をしていた。

「呑気なものだな、この基地の兵士は…」

「だな。佐渡島の兵士とは大違いだ」

ソレスタルビーイングの擬似太陽炉組は、向こうから通信が繋がられない事を良いことに言いたい放題だった。

『…あん？何か震動が強くなってねえか？』

『気のせいじゃねえか？あのミサイルの雨が原因だろ』

『いや、ミサイルはちょっと前に止ん……！？』

ズゴゴゴゴゴオオオ ツ！

震動をカットしていない機体でさえ感じられる程の揺れ…。  
空中にいたティエリア達も、通信を聞いて戦闘態勢を取った。

『お、おい…！まさかこれって…！！』

ドゴンツッ…！ ドゴンドゴンツッ…！

轟音を立てて砕ける大地。その砕けた地面から、突撃級がその巨体を現した。

『『べ、BETAだ ツ…！』』

今この時。第二次防衛ラインでも戦闘が開始された。  
BETAの奇襲によって…。

第八話（かなり修正）（後書き）

今年はエースコンバット5の年です。知ってる人いるかな…？

## 第九話（前書き）

テストはかどらずこつちが完成…。

前話で、ラッセの乗機をGN Xからガルムガンダムに変更しました。

## 第九話

）  
横浜基地 司令部

「だ、大規模BETA群、第二次防衛ラインに出現!!」

「何ですって!?!」

今まで単調な突撃しかしてこなかったBETAの奇襲。第一次防衛ラインもこの情報に統制を乱していた。

「博士、これは一体!!」

「私見ですが、BETAは佐渡島ハイヴの一件で、私達人類を明確な敵と認識したのかもしれない」

「…そして、隠していた牙を我等に向けた、と?」

「ええ。…最終防衛ラインに到達!基地を覆うよう円陣に展開しなさい!今のBETAなら直接基地を襲ってくる…!!」

夕呼の指示通り、陣形を半円から円に変えていると、プロレマイオス2のスメラギから緊急通信が入った。

『香月副司令、こちらのセンサーでも警戒をします。何かあれば直ぐに伝達を。後、』

「後…何かしら?」

『戦場で不可思議な現象が起きると思いますので、事前に通達しますのでお願いします』

「……わかったわ」

不可思議な、という部分で夕呼の眉が跳ね上がったが、何とかそれだけ言っと通信を乱暴に切った。



第二次防衛ライン

「く、来るな……アアアアアア!?」

「た、戦車級が……!」

「もうダメだアアアアア!」

「クソツ、お前等しつかりしやがれ!!」

ラッセの操るガラムガンダムは、BETAが現れた瞬間にGNメガランチャーを腰にしまい、両手のGNバルカンとサブマシンガンに切り替えた。

近づいてくる小型種をGNバルカンで片付けながら、混乱に陥った戦術機部隊の撤退を支援するためだ。

後方任務だ、と緩んでいた国連軍は次々とBETAに飲み込まれ、押し潰され……。今では帝国軍と辛うじて生き残った十数機の熟練衛士が必死で防衛ラインを維持している。しかし、依然としてBETAの数は減らず、最大火力を誇るセラヴィーは上手く動けていない。何故なら……

「クツ：味方とBETAの距離が近すぎる!」

そう、重火力を誇るセラヴィーの武装は、どれも一撃で要塞級を殺してしまうほどだ。そんなものが直撃すれば、戦術機など破片も残さずに溶けるてしまう。かすっても同様だ。

「……こうなったら致し方ない。ラッセ、少し時間を稼いでくれ！アレを使う！」

「アレか！わかったぜ……クソツ！スマン、要撃級クラスにはサブマシンガンで対処しないと分が悪い。急いでくれよティエリア……！」

ティエリアは頷くと、GNキャノンの威力を下げながら連射し、少し下がる。

「セラフィム……！」

そう叫ぶと、ティエリアの瞳が金色に輝き、セラヴィーに異変が起こった。

背中にあるガンダムフェイスが分離し、そこから頭部と脚部が生え、GNキャノンが腕になると真っ黒なガンダムが現れた。そう、トリアルシステムを扱えるセラフィムだ。

時を同じくして、支援爆撃を行っていたプロレマイオス2のハッチが開くと、もう一機のセラフィムが射出された。

ティエリアの乗っているセラフィム同様、橙色のGN粒子を放出しながら飛行するセラフィム二番機は、セラフィム一番機を射出した状態で固まっていたセラヴィーに取り付くと、セラヴィーに合体し再び戦線に参加した。

実は、完全に破壊されたセラフィムを再建造するには時間が足りず、なら元からある‘アレ’を使おう、というイアンの提案で、フェレシュテに連絡を取り二機のセラフィム「セム」を取り寄せただのだ。

セム事態がセラフイム同様の装備と構造をしていたため、簡単  
な　　と言つてもイアン達技術班がぶつ倒れたが　　改修を施すだ  
けでセラフイムになったのだ。

GNシールドは外され、ガンダムフェイスの変形機構を取り付  
けた一号機をみたティエリアの…

「ならばもう一機もセラフイムにしてしまつたらどうか？」

の一言で、二機の作製が決定したのだ。しかも、最後はまたぶ  
つ倒れて。ティエリアの一言で技術屋魂を燃やしたイアン達が悪い  
ので、その件はご愁傷様である。

セラフイムが二機になったことで、遠隔操作で溜めた粒子が尽  
きれば動けなくなる欠点が減り戦力が格段に上昇したのだ。

「セラフイム、セラヴィー、BETA群を排除する！！」

「やっと来やがったな！ラッセ・アイオン、敵を一掃する！！」

セラヴィーとガルムが上空に上がり、クアッドキャノンとGNメ  
ガランチャーの発射態勢に入る。橙色の粒子が圧縮、チャージされ、  
辺りに耳鳴りに似た音が響く。

「クアッドキャノン！！」

「GNメガランチャー、発射！！」

GNメガランチャーとGNキャノンの四門収束ビーム砲は突撃級  
に向けて同時に放たれ、戦艦の主砲クラスの威力を誇るビームは地  
面を大きく抉り、突撃級に守られていた要撃級と戦車級諸とも蒸発  
させた。

ガンダムタイプが一気に三機に増えた第二次防衛ラインは、ようやく態勢を立て直す事に成功するのだった……が。

『こちらHQ！ソレスタルビーイングからの情報によりBETAの地下侵攻をキャッチした！横浜基地の南10km地点に要塞級多数出現！！更に戦車、闘士、兵士級が基地に雪崩れ込んできている！！急ぎBETAを駆逐し基地を防衛せよ！！繰り返す……』

BETAの二度目の奇襲に、今までの対BETA戦の常識を覆された国連、帝国両軍は、大混乱に陥るのだった。

## 第十話（前書き）

テ、テスト終了二日目……。色々とダメな結果になりそうですが、  
きた最新話です。どうぞ！

## 第十話

） 第三次防衛ライン ）

最終防衛ラインに配備されていたヴァルキリーズは、基地のH S S T発着場側から現れたB E T Aを迎撃するため、全力で向かっていった。

ガンダム達の活躍で、防衛ラインが崩れるような事態は起こっていないが、その分戦場から離脱できなくなってしまったのだ。

現在、太平洋側に展開した帝国軍の戦艦が砲撃で要塞級が多い地点を狙っているが、どんどん溢れ出てくるB E T Aには焼け石に水状態だ。

プトレマイオス2も回頭し終わると、ビーム砲で迎撃を始めるが、こちらもミサイルを第一、第二次防衛ラインに回しているので、あまり芳しくない。

『ヴァルキリーズ全機に通達！要塞級はケルデイルが片付けてくれる。私達はそれ以外を残らず平らげるぞ！』

『『『『了解！！』』』』

十二機の不知火の編隊は、既に発着場まで辿り着いていた小型種を確認すると、一斉に突撃砲の引き金を引いた。

「チッ！またお前かよ虫頭野郎！！ハ口、GNライフルビット

展開。全部狙い撃つぞ!!」

『了解!! 了解!!』

ロックオンは、要塞級に向けて次々と必殺の光弾を放っていく。頭だけを綺麗に撃ち抜かれて死んだ要塞級が出来る中、その体内から這い出してくる物体にケルディムは気付くことはなかった。

『ッ!! レーザー回避! レーザー回避!!』

「な、何だつて!? ゲツ...!」

最初に撃ち抜いた個体から数十体の光線級が出現。その内の一体が放ったレーザーに、ライフルビットを直撃、破壊されたのだ。

「クソッ!! 何なんだよ要塞級は!? 腹の中身はBETAだから何か!？」

『GNフィールド展開! GNフィールド展開!』

『キヤアアア!!』

ライフルビットを回収し、GNフィールドを張り終わると、オープン回線で悲鳴が聞こえてきた。

カメラを向けると、要塞級の死骸から更に現れた光線級に、ヴァルキリーズの一機が跳躍ユニットごと下半身を溶かされていたのだ。

幸い誘爆の危険は無いようだが、小型種に集られ始めていた。

それを見たロックオンは舌打ちをし、撃墜されるのを覚悟でライフルビットを飛ばして要塞級を攻撃。不知火を助けるためGNビームピストル2を構え急行するのだった。

side ???

『キヤアアアア!』

油断した。その一言に全てが集約される。

今回のBETAは何かが違った。なのに、警戒もせずただただ撃ちまくっていた自分が恥ずかしい。

『晴子!? 晴子大丈夫! 急いでペイルアウトして! 小型種が…』

茜の悲痛な声…。ダメだ、倒れた時の衝撃で頭打っちゃったせいか、体が言うこと聞かないや…。

『ごめん…ね、茜。怪我…しちゃって、無理なん…だ。アハハ…』

『なっ!? 何でこんな時まで笑ってるのよバカ! しいから待ってなさい、今助けるから!』

『柏木、諦めるな!』

『武、ここは任せて早く柏木の下へ!』

『…いや、もう間に合わん…!』

間に合わない…。ああ、そっか。通信以外でガリガリ音が聞こえてたけど、戦車級が取り付いてたのか…。

…何で死ぬとわかってるのに、こんなに落ち着いてるのかな、私。



『柏木い　ッ！！』

『晴子　ッ！』

『ごめんね、みんな『諦めんじゃねえ！！』　ッ！？』

『ロックオン・ストラトス、救助作業を開始する！！』

ぼんやりとした意識で最後に見たのは、深緑色の装甲だった。

） side out ）

「クソツタレが…！！」

しつこくかじり付いている戦車級をビームピストル2で叩き落としながら悪態をつく。

直ぐにGNフィールドを展開して脱出を促すが、中の衛士は気を失ったのかさっきから反応がない。味方の不知火も動けない以上、ここは…。

「ミレイナ、聞こえるか！？」

『ストラトスさん、どうかしたですか？まさか怪我でも！？』

「違う違う。大破した国連機をトレミーに置きたいんだが、おやっさんの手は空いてるか？」

『…ふざけるなよロックオン！こちら慣れない砲撃で忙しいです。あ！パパ、外れたです！！』　す、すまん！』

「……………」

ハ口の『忙しい！ 忙しい！』は無視し、落ち着いたのを見計らってもう一度通信を入れる。既にライフルビットが粒子切れで戻ってきているのだ、要塞級の足止めに戻らないとヤバイ。

「とにかくハッチ開けて、ハ口達に救助させりゃあ良いんだよ！…わかったか!？」

『…り、了解…!!』

「よし!…その不知火、この機体はウチが救助するから少しだけがんばれ。すぐ戻る!」

『…わかった。部下を頼む!』

「任せました!ハ口、シールドビットとライフルビット射出!」

『了解! 了解!』

「少々頼り無いが、置いとくぜ!」

『感謝する!涼宮、白銀、柏木は無事だ!安心したのなら柏木の分もBETAを喰らってやれ!!』

『…了解!!』

ケルデイルが不知火を抱えあげると、そんな会話が交わされていた。

GNフィールドを一瞬だけ解除したブトレマイオス2に滑り込み、ハ口達が待機していた場所に不知火を置くと、そろそろと固定

作業に入った。

それを尻目にさっさと戦場に戻ろうとするロックオンの視界に、フラフラになりながらもダブルオーライザーに向かう刹那と、それを引き留めようとするフェルトの姿が目に入った。

「何やってんだアイツは……」

） side 刹那&フェルト ）

時を遡ることヴァルキリーズが戦闘を開始した直後。呻く以外全く動かなかつた刹那が、突如として苦し 「うん…うん…！」

刹那はゆっくりと体を起こすと、手を何度か開閉し動きを確かめる。

「…フェルト、戦況はどうなっているか…わかるか？」

「了解！ちよつと待ってね…（あれ？何で刹那が戦闘の事を？）

不思議に思いながらも、持っていた携帯端末を使って刹那にデータを見せる。

「…ねえ刹那。何か、悪夢でも見たの？すごくうなされてたけど…」

「………思いだ。果てしなくて、暗い、絶望に満ちた思い……。そ

れ以前は、人間の悪意ばかりだったのだが…」

「BETAが近づいた途端、感じたの？」

「ああ。……よし、大体は把握した。ダブルオーで出る！」

「ええ！？ちよ、ちよつと待って刹那！」

刹那はフェルトの言葉に答えず、近くに置いてあったパイロットスーツを着込む。

「無理だよ、たった今起きたばかりなのに…！」

「…行かなければならないんだ。BETAの意思を確かめるために…！」

「意思…？あ、危ない」

倒れながらもフェルトに支えられてやっとの事で格納庫に辿り着くと、そこにはケルデイルと上半身だけの機体が…

『刹那、目が覚めたのか？』

「ロックオン…ああ。心配をかけてすまなかった。今から俺も出る！」

今の一言と現状を見て全てを悟ったロックオン…。重いため息を吐いた。主に刹那の鈍感に対して。

『……刹那、どうしても行かなきゃなんないんだな？』

「ああ」

『はあ…。…フェルト、行かせてやれ。面倒はちゃんと見るから、な？信じて待ってのも大事だぜ？』

フェルトは一瞬、躊躇うような素振りをしたが、最後には刹那を掴んでいた腕を離した。

「…気をつけてね」

「ああ。ありがとう、フェルト」

(手間のかかる奴らだよ、ホント…)

そこまで見送ると、ロックオンはもう一度ため息を吐いてトレミーから発進するのだった。

side ヴァルキリーズ

ケルデイルが戦場を離れてからは、まさに地獄だった。小型種は戦車級を除き全てが基地に素通り状態だ。

「風間、十時方向の要撃級を狙え！宗像もだ！」

『了解！』

「弾切れが近い者は補給に…！」

ズビューーン！！

ビームを撃ち尽くして停止していたビット達が、弾かれたように上空に向かい、音の発生源にドッキングする。

『待たせたな！中の衛士は無事だ。今頃医務室で寝てるはずだぜ？』

「そうか、感謝する！…だが、こちらの状況はかなり最悪だ…」

『……だな。ま、こつちも最後の一機がもう少しで来る。それまでの辛抱……だ!!』

折り畳まれたGNスナイパーライフル2とビームピストル2を手当たり次第に撃ちながら降下し、みちるの不知火と背中を合わせる。

「まだ機体があったのか!？」

『ああ。煉鉄ハイヴを落とした時にパイロットが怪我してな。やっと治ったんだよ。……来たな!!』

何か聞き捨てならない事を言っていたようだが今は無視。プロレマイオス2を見上げれば、GNフィールドが正面だけ解除され、中央のカタパルトが開いていた。

そして射出されたのは、佐渡島ハイヴを一撃で焼き払った青と白のガンダム……。

『……刹那・F・セイエイ。ダブルオーライザー、出る!!』

ガンダムを超えたガンダムと、純粹種のイノベーターの戦いが、今始まった。

## 第十話（後書き）

ロックオンハーレム計画……ありかもしれない！

ロ「…おい作者、その頭吹っ飛ばされテエのか！？ああ！？」

ヨ「げ！？何でロックオンがここに…！」

ロ「ゴチャゴチャうるせえ！《ズドン！》」

ヨ「ギヤアアアア！や、やめろ！俺の運動神経じゃ避けきれ《ビュオン！》クツ…こうなったらあの人だ！」

ア「ライル…私とは遊びだったの…？」

ロ「ア、アニュー！？ま、待て、落ち着くんだ！これは作者のわ…！」

ア「問答…無用！行きなさい、ファング…！」

ヨ「フハハハハ！自らの過ちを呪うがいい！（クルーゼ風）」

ア「あら？何を言ってるのかしら？…貴方も同罪よ…！」

ヨ「あ、あれ？何でロックオンをいたぶってたファングが全部こっちに…？」

ア「死になさい！ファング…！」

ヨ「ギヤアアアアアア…！」

その後、ロックオンはアニューに色々と埋め合わせをされたとき。

## 第十一話（前書き）

テスト明けの一発目。

後書きにアンケートがあるので、よろしければご協力お願いします  
！





横浜基地一帯が、翠色の粒子に包まれた。

）  
横浜基地 地上 ）

「ハロ、トランザムバーストを使うぞ！！」

『了解！ 了解！ トランザム起動！ 並びにライザーシステム作動！ ライザーシステム作動！ GNDライブ同期中！ 同期中！』

オーライザーの赤ハロがライザーシステムを作動させ、トランザム状態の二基のGNDライブの稼働率と同調率を100%まで引き上げる。GNDライブが唸るような音を奏で始め、準備が整ったことを刹那に知らせた。

『同期完了！ 同期完了！』

「よし、トランザムバースト！！」

刹那の瞳が金色に輝き、ダブルオーライザーはそれをセンサーで感知するとトランザムバーストを発動させた。

七色に輝いた高濃度のGN粒子は、紅く輝いたダブルオーのツインドライブから際限無く溢れだし、瞬く間に戦場一帯を覆い尽くす。

《何…この七色の光は…？》  
《何だ！？何がどうなってやがる！？》  
《先輩達の声が、頭の中に…！？》  
《刹那か…。起きんのがオセエンだよ！！》

第一次防衛ラインで戦う人々の声…。

《た、隊長ツ！この光は一体?!》  
《落ち着くんだ！我々の切り札が動いただけだ！》  
《切り札…だと？》

《その通…り！高濃度のGN粒子によって人の意識と意識を繋げる……でよかったよな、ティエリア？》

《まあ大体そうだ。それよりも今は、目の前の脅威を排除する。ラッセ、もう一度GNメガランチャーを撃てるか？》

《任せな！何時でも行けるぜ！》  
《意識の共有…これなら…！おい、A小隊、B小隊！3、2、1で120mmの一斉掃射、いけるな！？》

《それでは我が突撃前衛部隊も続こう！全機、抜刀！！》

意識の共有化のメリットを最大限に活用し戦線を押し上げる第二次防衛ライン。

《ウソ…こんな非科学的なことが…！》  
《榊は頭が堅い。もっと柔軟になるべき》  
《なっ！？だあれが石頭ですって！？》  
《わわわ！お、落ち着いて下さい榊さん！！》

《そうだよ！慧さんも本当のこと言っちゃダメじゃないか！！》  
《《《……………》》》  
《全く…そなた達は…》

コントもどきを披露する小隊や。

《行くわよ茜！柏木の仇、しっかり取るわよ！！》

《了か…って速瀬中尉、晴子はまだ死んでませんよ！！》

《流石は速瀬中尉。獲物を目の前にして野獣になりましたか》

《あらあら美冴さん。そこまでストレートに言わなくても…》

《むう…なあ…かあ…たあ…！！とついでに風間！後で覚えてらっしゃい！！》

《すみません、もう袴子と約束済みなので。な、袴子？》

《……貴様らは無駄口を叩かずに集中せんか！！！！》

いつも通りにしすぎ雷を落とされる者。

《行くぞ白銀！！狙撃の深緑ばかりに要塞級をやらせるな！！》

《…認めない…認めないぞ…！！》

《し、白銀少尉…？》

《ま、真那樣…コイツ壊れたんじゃ！？》

《な、なんだか凄く怖いです…！！》

《バ、バカ！！あんな変態が怖いわけ…》

《月光蝶や光の翼は認めても…！！こんな無茶苦茶かガンダム、認めてたまるかアアアアアア！！》

《…《ヒイヒイヒイヒイ！？》…》

自分のアイデンティティーを守るため鬼神となる者。

《…無茶苦茶も今だけは感謝するわ…！ヴァルキリーズ、聞こえているわね！？なら全機、今すぐに持ち場を放棄！小型種と少数の大型種が基地内部に直接攻撃してきたわ。凄乃皇防衛のため91

番格納庫に向かいなさい！！今から二十秒だけ地下への通路を開けるわ。急いで！！》

通信の代わりに意識に語りかける者。

そして

！》  
《何処だ…。お前たちの意思是、目的は…！答えるオオオオ！

BETAの意思を確かめるために、より深く同調する刹那。見つかるのは人間だった者の残留思念や基地内部で戦っている兵士達の叫びのみ…。だが、煉鉄ハイヴで一瞬だけ感じたのモノを刹那は覚えていた。

黒く、歪みに歪みまくったタールの中にあつた唯一の白。助けを求めるような、そんな思念を…。

《…イ…………》

《何だ！？》

《…エ…………イ…………》

基地内部で戦っている人々の声が多すぎて、上手く聞き取ることができない…。

《もう一度、もう一度答えてくれ！！》

《……………へカエ…………… ツー！？》

直後、形容し難い叫びを上げて声は通らなくなった。

） ヴァルキリーズ ）

夕呼の念話？の指示で地下格納庫まで来たヴァルキリーズは、基地内部の生きている通信回線を使って夕呼と緊急ブリーフィングを開いていた。

BETAの目的が反応炉であり、そこでのエネルギー補給が狙いのこと。

その狙いを逸らすため、BETAを惹き付けるムアコック・レヒテ機関を始動させて囮にすること。

反応炉破壊のためみちると水月の二人がS-11を設置しに行くこと。

残った隊全員でムアコック・レヒテ機関を始動させた凄乃皇式型並びに四型の防衛につくこと。

の以上が決定された。

《じゃあ白銀、アンタが突撃前衛長よ。私の代わり、しっかり勤めなさいよ！！》

《月詠中尉はヴァルキリーズの指揮をお任せしたい。よろしく頼みます》

《心得た》

二機は軽く頷くと、反応炉目指してエレベーターに乗り込むのだった。

みちる達が出撃してから五分。それからほとんど会話もなく、聞こえてくるのは砲弾の炸裂音と銃声だけであった。……………銃声？

『月詠大尉！？』

『わかっている！全機、隔壁を中心に陣を組め！！充填封鎖は間に合わなかったか…！』

真耶の言葉がきつかけだったのか、隔壁がギシャギシャと喰い破られ、赤黒い戦車級が姿を現した。

『彩峰、そっちの戦車級を頼む！』

『任された…！』

一度喰い破られ隔壁が保ったのは、わずか一瞬だった。小さな穴に次々と戦車級の腕が押し込まれ、一匹、また一匹と格納庫に侵入してきたのだ。

ギカガガガガガ…！

一際大きな軋む音が響くと、突撃級と要撃級までもが入り込んできた。もちろん、隔壁は用を成さず鉄屑と化していた。

『隔壁が…！』

『チツ…！全機、後退しながら迎撃！弾切れに注意しろ…！』

そう言つと、紅色に塗装された武御雷は長刀を両手に持ち突撃する。

武達突撃前衛部隊もそれに続き、大型種を切り伏せる…が

『あぁッ！凄乃皇に戦車級が…！！』

壬姫の悲鳴を聞き、一斉に凄乃皇を見る。するとそこには、武型にへばりつき装甲を噛み砕こうとしている戦車級の姿があった。

『宗像中尉と風間中尉は凄乃皇に取り付いた戦車級を！』

『了解…！！』

撃つても撃つても数が減らず、機体も衛士の負担も無視できないレベルになってきた頃。みちる達の意識が武達に飛び込んできた。

『ヴァルキリーズ、聞こえるか！？今S-11の設置が完了した。三十秒後に爆発する！』

『伊隅大尉急いで下さい！！中に入った戦車級の足止めも限界です…！！』

『もう終わった！すぐに脱出するぞ！』

『了解！』

『やったあ！これでBETAも大人しく「ズドオオオオオン…！！」…え？』

美琴の歓声を嘲笑うかの様に地下から響く重低音。地下で爆発するものなどS-11しかあり得ない。そしてみちる達が言っていた起爆時間は三十秒。一体何が…。



） 反応炉 ）

『伊隅大尉急いで下さい！！中に入った戦車級の足止めも限界です！！』

『もう終わった！すぐに脱出するぞ！』

『了解！』

みちるが振り向くと、そろそろ主広間の入口から入ってくる小型種の群れが見てとれた。

『予想以上に早いな。もう隔壁が破られるとは…』

『だあああもうツ！！ウジャウジャウジャウジャ鬱陶しい！！』

『後二十秒…速瀬、急げ！！』

『わかってま……ツ！？』

その瞬間だった。突如、背後から巨大な爆風と衝撃波が匍匐飛行をしていた二機を襲ったのだ。

入口まで到着していた二機は、そのまま押し出される形で主広間から脱出できたが、少なからず損傷もしたようだ。

『キヤアアア！！』

『ぐう…！な、何故S-11が…！？』

実は、速瀬が迎撃していた戦車級の中に、一匹だけその弾幕の穴を抜けて反応炉に取り付いた個体があったのだ。

その個体は瞬時にエネルギーを補給し、反応炉にセットされているS-11の排除を命じられたのだ。

ここまでならS-11は不発で終わる筈なのだが、幸か不幸か戦車級の受け取った情報は外部からの‘強制起爆’の仕方だった。意思を持たなかったため、命令通りにS-11を自分の知っている‘解体方法’で解体したからこそ、起きた事故だった。

『クソツ！機体は右脚部損傷、左腕部破損：跳躍ユニットが生きてるのが奇跡だな。速瀬、そっちはどうだ？』

『イテテテ……。ち、ちよつと待つてください。：あちゃー、こっちは両足ともアウト。下半身は完全にオシヤカです。：ペイルアウトも激突の衝撃で無理ですね。大尉だけでも脱出してください』  
『……無理だな。既に囲まれてしまった。どうせ自力で立てないのでは結果は同じだ』

破損した片足は、立たせようとしただけで火花を上げ、まともな着地や跳躍すら不可能だった。

『みたい…ですね…。じゃあ、隊規通りにやりますか！』

ぎこちない動作で突撃砲を構える水月の不知火。みちるもそれに続き、破損した足で片膝を着きながら両手に突撃砲を構えた。

『フツ…まさかお前と一緒に逝くことになるとはな』

『私だつてそうですよ！大尉が一番最後まで生き残ると思ってましたから』

『…ならば、その期待に答えなければな！…来るぞ！』

『了解！ヴァルキリー2、フォックス1！！』  
『ヴァルキリー1、フォック……』

ズギューーン！！

二機が砲撃を開始しようとしたまさにその瞬間。目の前にいた  
BETAが蒸発した。

『お二人さん、待たせたな！助けに来たぜ！！』

『な……！？バ、バカ者！！私達よりも上の『それなら、刹那が  
向かってる。……あんまし言いたかないんだが、刹那は俺たちの中で  
一番強いんだ。安心しな』……』

シールドビット二基が寄って来る戦車級を押し潰し、ライフル  
ビットが高出力のビームで小型大型の種類関係なく吹き飛ばしてい  
く。

『さて、お喋りはここまです。さっさと脱出するぞ！捕まれ！  
』！』

差し出されたケルデイムの腕を見て、みちる機が水月機を抱え  
上げた。

『た、大尉！？』

『頼む、ケルデイムのパイロット』

『了解。ちと揺れるが我慢してくれな。後……』

『後?』

『俺の名前はロックオン・ストラトスだ!ハロ、トランザムで地上まで一気に抜けるぞ!』

『了解! 了解!』

ケルディムが紅く輝き、猛スピードで上昇するのだった。

## 第十一話（後書き）

以前から擬似太陽炉に関して色々ご意見をいただきましたが、ここで擬似太陽炉を国連製ヒリかイノベーター製かでアンケートを取りたいと思います。

おもにトランザムをしても大丈夫かそうじゃないかの違いになります。

期限は来週の18日のお昼までにします。

ご協力、よろしく願います！

## 第十二話（前書き）

…何気に思った疑問。プロトレマイオス2の最大搭載って何機分なん  
だろ…？  
どなたかご存知ないですか？

## 第十二話

） 91番格納庫 ）

『速瀬中尉 ツ!!!』

『伊隅大尉ツ!?こんな時に意識の共有が切れるなんて…!』

みちる達の悲鳴を最後に、ダブルオーのランザムバーストが消えてしまったせいで、テレパシーモドキができなくなったのだ。脳裏に過る最悪な結末を振り払うことができず、ヴァルキリーズの土気はガタ落ちしてしまう。

そんな中、茜は瞳に涙を浮かせ必死に引き金を引き続けていた。

『うう…!!…う!』

『茜、前を見て!要撃級が…!』

『……あ』

ズゴシャ!!

頭に血が上った茜は、視界の隅から近づいてくる要撃級に気づけず、強烈な一撃を胴体にもらってしまった。

茜の不知火は格納庫の床を一、二度バウンドしながら吹き飛び、四型の整備ハンガーに突っ込む形で停止し、そのまま動かなくなる。

『茜ええ!!』

『委員長、避ける!!』

『ツ!?ゲウ…!!…!!…!!…!!…!!…!!…!!…!!…!!…!!…!!』

武の叫びに何とか反応し、機体が僅かだが左に動く。その直後、

右腕が要撃級の腕にもぎ取られてしまった。

すぐに左腕の突撃砲でその要撃級を蜂の巣にし、後退する。

『無事か、榊！？』

『え、ええ…怪我はないわ…』

機体の重量変化と衝撃の影響で、フラフラになった千鶴の不知火をかばうように、冥夜の不知火が前に出る。

『ダメです！！宗像少尉、風間少尉、淩乃皇から離れて下

さい！崩れ…』

『キヤアアアア！！』

『うわああああ！！』

ズドオオオオオン！！

壬姫が悲鳴を上げた瞬間、戦車級に群がられていた淩乃皇式型が倒壊した。

二機とも淩乃皇の上に乗っていたお陰で、淩乃皇のパーツに押し潰されることは無かったものの、不安定な姿勢のせいで着地に失敗。両脚が悲しそうな音をたててひしゃげた。

『べ、BETAが更に侵入！！このままじゃ…！！』

『諦めるな！！まだ可能性は…！！』

『真耶様、危ない！！』

それは斯衛の三機の内誰からだったのか。真耶が気付いた時には要撃級が腕を振りかぶっていた。



死んだ…。死神の鎌が迫るなか、心に残るのは悔しさだけだった。

戒達の悲鳴。冥夜様の叫び。ヴァルキリーズ達の叫びを聞きながら、真耶は相討ち覚悟で長刀を突き出した。

『刹那・F・セイエイ、目標を駆逐する！！』

ゆっくりと瞼を開けると、そこには全く無傷な管制ユニットがあった。

『一体…何が…？』

目の前にいた要撃級は跡形も無く、床を見れば灼熱化している。そして機体のすぐ隣からピンク色の光弾が発射されているのを見て、真耶は完全に復活した。

『…ッ！すまない、少し取り乱した。そちらの青い機体、援護感謝する』

『気にするな！それよりもコイツ等を一扫するぞ！！』

青い機体：ダブルオーライザーは腰のGNソード2を両手に構えると、翠色の粒子を噴出させながらBETAを切り刻み始めた。

それから三時間後。侵攻してきたBETAの殆どを殲滅した横浜基地防衛戦は、多大な犠牲を払うことで終結することとなった。

基地機能の50%は使用不能となり、戦術機部隊も第二次、第三次防衛ラインの損害で60%が撃破。損傷した機体を加えたら、無事な機体は一機として存在していない。

事実上、横浜基地は壊滅したのと同義な状態となったのだった。

戦闘終了から半日。ようやく小型種の掃討が確認され、基地にもほっとした空気が流れ出した。

「…香月博士。凄乃皇は二型が全壊。四型は奇跡的に小破で済んだ、と整備班から通信が…」

とは言っても、それは末端の兵士の話。司令室付きのCPや将校には事後処理が山のように残っていた。

「…そう。涼宮、ご苦労様。ヴァルキリーズは？」

「…伊隅大尉と速瀬中尉は機体を失うだけで済みました。地上で損傷を受けた柏木少尉はプロレマイオスで治療中。……茜も、特別に治療してもらっています」

「…戦死者が出なかつただけマシね…。予備の機体は格納庫ごとダメだし、急いで取り寄せた所で一体どれだけかかることやら…」

…。これだと煉鉄ハイヴ侵攻は暫くムリ。…頭痛くなってきた」

「後、ソレスタルビーイングのメンバーが休息で基地に入らせてくれと通信がありました。必要なら基地の補修にも協力してくれるとも」

「…なら白銀に案内させなさい。アイツには色々教えてあるから…」

ぞんざいに言い捨てると、夕呼ははあく、と深いため息を吐いた。

それから暫く。白銀がソレスタルビーイングの案内を始めたのと、八口達が基地の補修を始めた、と通信が入ったのと同時に、霞が純夏を支えて司令室に入ってきた。ODLが滴る体にタオルを巻くだけの格好に、男性は急いで視線を逸らす。

「ちよっ…社、鑑!!何て格好で…!」

「聞いて…下さい、香月先生…!私、わかったんです…BETAの事が…!」 ……博士、純夏さんが言っていることは…本当です…!…聞いてあげて下さい…!」

霞の真剣な表情を見て、純夏に説明を促せる。

そして、純夏が語ったBETAの新事実に、夕呼とたまたまその場にいた兵士は全員、顔面蒼白となるのだった。

戦闘が終了してから更に半日。ようやく睡眠薬による強制的な眠りから醒めた武は、格納庫で修理を受けている不知火をじつ…と眺めていた。

整備兵が慌ただしく走り回り、あれパーツが足りない、工具寄せ、もっと働け等々、様々な声で満ちていた。

「……………やっぱり、俺のは直らないのか……………」

武が、元の世界ではまっていたバルジャーノン仕込みの三次元機動は、機体に異常なほどの負荷をかける。新品同様の関節が、たった二回の出撃で使い潰れる程に…だ。

他の機体も、X M 3を使った機動のせいで色々な部分がポロポロ。新品の機体に交換した方が早い、というレベルがほとんどなのだ。

…と、物思いに耽っていた武の視界に、オレンジ色のハ口と緑色のパイロットスーツを着た男が格納庫に入ってくるのを捉えた。

「あれって…ソレスタルビーイング!? 何で基地の中に……………」

そう思った武の足は、自然と一人と一体の元に向かっていた。

「……………でやられた三機をこっちに運び込みたいんだが、いいか? ちょっとばかしスペースを取っててな」

どうやら、柏木と伊隅大尉達の機体の事を話してるみたいだ。パイロットスーツの色からして…狙撃特化型ガンダムのパイロットか……………。

「…わかりました。格納庫まで運んでいただけますか？それさえしていただければ、後は自分達が」

「悪いね。じゃ、頼んだぜ！……で、お前は何の用だ？坊主」  
「ッ！気づいてたのか…」

「気配も隠してないのに、当たり前だろ。…興味本意なら止めてくれ。聞いてたんならわかると思うが、今から仕事があるんでね」

『ロックオン！ 通信！ 通信！』

「は？フェルトからか…。坊主、ちよつと外すぞ」

そう言うと、ロックオンと呼ばれた男は格納庫の隅に歩いて行き、残されたのは武とハ口だけとなった。

ゴロゴロ　ゴロゴロ　ピョン！　ゴロゴロ…

ロックオンが来るまで暇なのか、ハ口は転がったり跳ねたりと遊び始め、武はそれを見て心中感激していたり…。

「…わかった。おい、シロガネタケル。今からこの基地にマイスター…ガンダムのパイロットが上陸するから、案内頼むぞ」

「え！？何で俺が…」

「副司令殿からの命令だとさ。ほれ、行くぞ！」

「あ、ちよつと！」

何が何だかわからない、といった顔のまま、武はロックオンの後を追うのだった。

） H S S T 発着場 ）

「な、何でこんな第所帯なんだよ!？」

「そんなこと言われても…。トレミークル（私達）にも息抜きは必要なのよ。よろしくね、白銀少尉!」

スメラギに続きフェルト達が口々に「よろしく」と言われる武イマイチ納得しない顔をしながらも、九人を連れて基地に入った。

ガヤガヤと兵士達が食事を取っている中、武はスメラギ達をP X に連れてきた。

「まずはP X…つまり食堂と購買を合わせた感じのものです。兵士の憩いの場でもあります」

「へえ〜。異世界でも同じ料理があるのね…」

「あれ?でも、名前の前に、合成’って付いてるです!」

「まあそこら辺は後で…。次に行きます」

そして次に向かったのはロックオンと出会った場所…格納庫であつた。

「おお！？これがこの世界のモビルスーツか！！」

「モビルスーツじゃなくて戦術機です！…やっぱりの名称はモビルスーツは変わらないのか…」

イアンは技術屋としての血が騒ぐのか、撃震やF-15E、不知火を見て激しく興奮している。

「あまり騒がしくするとおやっさん達の邪魔になるんで、次に行「白銀…さん！」霞！？どうしたんだ？」

次に行こう、と言おうとした瞬間、腰に来る衝撃に驚いて下を向くと、霞が息を切らせながらもたれ掛かっていたのだ。

「博士…が…！呼んで…います…！ソレスタルビーイングの方も…一緒に…！」

「…わかった。スメラギさん、よろしいですか？」

「…構わないわ。何やら、大事の予感がするわね…。イアンと刹那は付いてきて。残りはさっきのPXで待機！」

『了解』

「では、案内します。…霞、おぶるから背中に乗れ」

「…はい」

まだ息の整っていない霞を背負いながら、武は早足で夕呼の執務室に向かうのだった。

## 第十二話（後書き）

アンケートは期限より早いですがイノベーター製に決定します！  
アンケートにご協力頂いた方、本当にありがとうございます！！

それでは、ちょっとしたIfな小話を…。

） プトレマイオス2 ）

ソレスタルビーイングを出撃してから一日。スメラギの部屋では  
軽い酒宴が開かれていた。

「そういえば、スメラギさん。あの大量のGNドライブはどう  
したんですか？格納庫に満杯で、八口達が片付けるの大変そうだし  
だけど…」

「そうだぞ！？出港前に擦じ込みやがって…！」

ワイン片手のハレルヤの眩きに、ビール缶片手にイアンが騒ぐ。

「ごめんなさ〜い！だってビリーったら、昨日までに届けるっ  
て約束なのにウソつくんだもん〜」

「ビリーって確か、あの時ブリッジにいた…？」

「そうよ〜！ラッセよく覚えてるじゃない！…ったく、『僕に  
できることならなんでも』って言ったのに、あの男は…」



「……スメラギさん、まさかビリーって人からたかつたんですか!？」

「たかつたなんて失礼ね〜! 『頂戴』って言ったら『わかつた』って答えてくれたんだもん」

「…おいラッセ、ビリーってヤツ、スメラギに惚れてるんじゃない?」

「…ああ。その通りだ」

「人の恋心を利用するだなんて…」

男たちは完全に出来上がったスメラギから離れ、隅でゴニョゴニョ。

「アハハ〜! さあみんな、飲むわよ!」

そしてその夜。三人の屍が生まれ、スメラギ悪女伝説が生まれるのだった。

P・S・ビリー製になったら付け加える予定だった一コマ。お蔵入りもなんだっただんではっつけました。

第十三話（18日修正）（前書き）

ちよつと夕呼先生が原作よりか弱く？なっております。

第十三話（18日修正）

） 執務室 ）

「失礼します！……夕呼先生、どうしたんですか！？」

武がスメラギ、刹那、イアンを連れて夕呼の執務室に入ると、部屋は今までにないぐらいに荒れ果てていた。

隅に積み立てられていた本は雪崩を起こしたように散らばり、書類に至ってはビリビリに引き裂かれていた。

そして…

「なあによ〜白銀〜！遅いじゃない〜！！」

格好はいつものままだが、秘蔵の日本酒片手に夕呼は酔い潰れていたのだ。

その姿は、前の世界で見せた最後の夕呼と似ていて、武は立ち尽くすことしかできなかった。

「……白銀少尉、これは一体？」

夕呼の惨状に疑問に思ったスメラギが、部屋に入ったまま固まっている武に聞いた。

「わ、わかりません…！…ただ、先生がこうなるには余程の事がないと…」

「ということは、その余程の事が起きたのね…」

すると、スメラギはゆっくりと夕呼に近づき、自分の方に顔を

向けさせると…

パシ　　ンツ！！

強烈な平手打ちを放った。

執務室はしーん、と静かになり、武は口をあんぐりと開けていた。

「…香月副司令。何があつたかはわかりませんが………しつかりしなさい！！貴女がそんな状態では、人類はどうなるの！？」

「……ンタに、何が………」

「え？」

平手打ちをもらつてから一切動かなかつた夕呼が、動いた。武は直感的に、夕呼がキレた、と判断し、気を引き締める。

「アンタに私の何がわかるのよ！？私が！！何人もの部下や！！親友を殺してまでも！！完遂させようとした計画は！！逆に奴等を強くさせるだけだったのよ！！」

そして、泣きながらに夕呼が語った内容は、一同の顔を青ざめさせるものだった。

反応炉が全て繋がっていて通信装置の役割を持っていたこと。そして00ユニットがODLの浄化をする度に情報がBETAに漏れていたこと…だ。

執務室中に響く夕呼の怒声。その声には、今まで我慢していたであろう様々な感情が込められていた。

部下や親友を殺した罪悪感、今までの研究が無駄になつた虚無

感、そして…人類のためではなくBETAに協力していた自分に対する憤り。

それらがごった混ぜになった声を聞きながらも、スメラギは、斬った。

「私は貴女じゃないもの。そんなことはわからないわ。…でもね、これだけは言えるわ」

「その失敗を後悔するぐらいなら、その失敗を乗り越えて次に生かさない！私達は第五計画には協力しない。第四計画だから協力したのよ。…その話が本当なら、まだ間に合うわ。戦略情報が行き渡るまで二週間はあらずよ。ならそれまでに、オリジナルハイヴを落とせば…」

「無理よ…。ヴァルキリーズの機体は全てダメ。頼みの凄乃皇も破損のせいで武装面で…」

「機体なら問題ないぞ？こっちの予備機、それにガルムも出せる！後、凄乃皇つてのは状態を見ないとわからんが、俺達と八口なら修理も強化も出来るぞ！」

「ア、アンタ達…」

夕呼は驚いた顔でイアンとスメラギを見つめる。そして顔を俯かせ、再び顔をあげた時には、そこには今まで以上に力に満ちた顔付きをした夕呼がいた。

「…ありがとう、スメラギ。アンタのお陰で、元に戻れたわ」

「気にしなくていいわよ。私だって似たような経験があったから…」

「…すまない、香月副司令。一つ頼みがあるのだが、いいか？」

夕呼とスメラギが笑いあう中、今まで黙ってなり行きを見守っていた刹那が会話に参加した。

「…アンタ何時からここに居たの？」

「…はじめからだ。…副司令が話していた00ユニットと話  
がしたいのだが、大丈夫か？」

「…今はダメよ。ODLの劣化を防ぐために自閉モードに入っ  
てるから」

「…わかった。いきなりすまなかった」

そう言うと刹那は再び壁にもたれ静かになった。

刹那の行動に、空気を乱された一同は、イアンの咳払いによっ  
て復活した。

「と、取り敢えず、こっちが出せる予備機を見せよう！まずは  
それからだ！」

「そ、そうね！行きましょう、香月副司令！」 「え、ええ

…」

「あ、俺も行きます！」

瞬く間に執務室を後にしたスメラギ達は、PXで他のメンバー  
と合流し、偶然居合わせた207Bも拾って、プロレマイオスに向  
かうのだった。…刹那を置いて。

「…俺は、空気なのか？」

「…違つと、思いますよ」

そして、少し落ち込んだ刹那は、執務室に入ってきた霞に慰め  
られるのだった。

） プトレマイオス2 ）

第一格納庫に向かう途中、マイスターと207Bはかなり打ち解けていた。

「へえ。そんなことがあったんだ…」

「そうなんですよ！全く、昔の彩峰ときたら…」

「アレルヤ、浮気はダメよ…？」

真面目な二人が仲良く喋り、一人が嫉妬したり…。

「あの時のロックオンさんの狙撃、ホント〜に凄かったですよ  
！！」

「サンキューな、王妃。けど、お前だって中々良いセンスだぜ  
？」

狙撃組が父娘のように談笑したり、

「うわあ〜！！これが本当に宇宙船なの！？すごいな〜」

「もう、美琴ちゃん！トレミーは宇宙船じゃなくて宇宙戦艦  
です！」

「宇宙戦艦もどうかと思っぞ、ミレイナ」

能天気一方通行組に冷静に突っ込むイノベイドや、

「そうか、そなたの想い人も相当鈍いのか…」  
「はい…。冥夜さんも、苦労してるんですね」

同じ鈍感男を好きになつた者同士慰めあつたり、

「……ラッセ、欲求不満？」

「待て待て待て待て！今までの会話でどこからそんな言葉が出てくるんだ！？」

「彩峰の変なところは昔からだからな…諦めろ、ラッセ」

「白銀、それは失礼」

唐突に変な話を持ち出す焼きそば好きに翻弄される二人。

…と、こんな感じに

「…すっかり意気投合したわね、アイツ等」

「フッフ、良いことじゃない。…さて、着いたわ」

そして気づけば、第二格納庫の扉の前に来ていた。

後ろで響いていた笑い声はなりを潜め、真剣な空気が場を満たす。

「じゃあ行くぞ！」

イアンの合図と共に、格納庫の扉が開かれた。



## 第十三話（18日修正）（後書き）

作者の中ではヴァルキリーズの貸与機体は全部で九機。内五機は決定しているのですが、残りがまだ…？

という訳で、ヴァルキリーズが乗る機体を募集しようと思います！！

幾つか制限があるのですが、

- 1、機体でGNドライブを使う機体ならば、全てイノベーター製の太陽炉を使う
- 2、ティエレンとかも一応ありますが採用はまず無いです。
- 3、ガンダムの場合、第一世代機は流石に無理です。第二世代以降でお願いします。

以上の三つになります。発表は次話の内容に書きますので、期限は二十一日までとなります。

ご協力、よろしく願います！

## 第十四話（前書き）

アンケートの結果発表〜〜！！

多数のご応募ありがとうございました！！今回は予め決めていた五機しか本編に出ていませんが、機体は後書きに書きます！

## 第十四話

） 第二格納庫 ）

プトレマイオス2には、格納庫が四つある。

まず、左右のカタパルトの下にある第一、第二格納庫。船体中央にあるメインカタパルトの中にある第三格納庫。そして船体後方にある後部格納庫だ。

それぞれ四機、四機、三機、五機とモバイルスーツを格納できる。地球に行く際、ヴェーダの指示で地上の部隊に援軍として持って行く機体を満載していたのだ。

「あ！オレンジの羽根付きだよ！」

「あれはアリオスって名前なんだ。そしてアリオスのすぐ後ろにあるのが……」

美琴が興奮したようにアリオスを指差し、アレルヤがアリオスの名前を言い、

「僕の機体、セラヴィーだ」  
「ティエリアが続く。」

「……てことは、奥にあるコンテナが俺達の機体！？」  
「そう、お前さん達に、貸す、機体だ！」

イアンが貸すの部分を強調しながら、手元のセンサーを操作する。ガコン、という音が響き、コンテナが開きはじめた。

「……アリオスとセラヴィーに、似てる？」

「二機の機体を見た彩峰の第一声。千鶴もうんうん、と頷いている。

「良く気がついたな！こいつ等はアリオス達の一つ前、第三世代の機体なんだ」

「アリオスに似ている機体がGN-003/R2キュリオス・リペア2。アリオス同様、一撃離脱を得意とする可変機体だよ」

「そして、セラヴィー似の機体はGN-005/R2/PHヴァーチエフィジカル・リペア2。砲撃・殲滅戦用のモビルスーツだ」

「二機の機体は格納庫のライトを浴びて装甲を輝かせる。」

「まあ、第三世代といっても第四世代の技術を使って修復・改良したから性能は折り紙付きだ。…太陽炉は擬似だけかな」

「擬似？オリジナルとは何処が違うの！？」

科学者の血が騒ぐのか、夕呼がすごい勢いで噛み付いてきた。

「お、落ち着け…！オリジナルの太陽炉は半永久機関なんだが、擬似太陽炉は稼働時間に限りがあるのと、トランザムシステムでGN粒子を使い果たすと焼き切れる違いがある。トランザムというのは、機体のGN粒子消費量を跳ね上げることで、通常の三倍のスペックを叩き出すシステムだ。だが、一度機体内のGN粒子を使い切ると再チャージまで機体性能がガタ落ちする欠点があつて、諸刃の剣でもあるんだ」

最初は押されていたイアンも、語り始めれば饒舌になり他のメンバーはまた始まったと呆れていた。

「イアン、解説は後にして早く機体を廻るわよ」

「おお、すまんすまん！じゃあ、次は第一格納庫だ！」

） 第一格納庫 ）

「ああっ！あれってロックオンさんの！」

「そう、ケルディムだ。今はハイヴ内戦向けに換装してるところだけどな」

第一格納庫にはロックオンのケルディムと、刹那のダブルオーライザーが換装・整備作業を受けていた。

「ん？コンテナが一つしか見当たらぬが、もう一機はどうしたのだ？」

冥夜が格納庫を見て、コンテナが一つしか無いことをイアンに聞く。他の207Bメンバーも同じだったのか、うんうんと頷いた。

「よく奥をしてみる。コンテナで隠れて見えないだけだ」

『あ…』

イアンに來い來いと手招きされて来てみれば、確かにコンテナで隠れて見えない位置にダブルオーライザーに似た青と白の機体が整備を受けていた。

「GN-001/R3エクシア・リペア3。刹那の元愛機で、剣を使った近接戦に特化した機体だ」

「剣ですか。なら冥夜さんにぴったりの機体ですね！」  
「そ、そうか…？」

王姫の誉め言葉に照れる冥夜。…雷電氏が見たら、一瞬でポックリ逝きそうな破壊力だ。

「お話し中のところ悪いが、次はコイツだ」

先程と同じようにイアンが手元のセンサーを操作し、コンテナを開く。

「ケルディムに似てる…？でも、所々ちよつと違いますね」

「王姫の言う通り、コイツはケルディムの一個前の機体で、名前はGN-002/R2デユナメス・リペア2。遠距離狙撃に特化した機体だ」

深緑色のシールドで機体前面をほぼカバーした状態で固定されたデユナメスを、狙撃特化と聞いて目を輝かせる王姫。

冥夜は、エクシアが気に入ったようで機体の前にへばり付いていた。

「ひとまず、今動ける奴に貸す機体は、中央の第三格納庫にあるガラムを入れて五機だ。お前さん達がどの機体に乗るかはそつちで決めてくれ」

「まだ機体はあるのかしら？一応、そつちで治療中の涼宮と柏木以外に後四人分欲しいんだけど」

夕呼の強かさに舌を巻くイアン。事実、機体を貸すと言った手前、ウソは付けない。

「ま、まあ…後部格納庫にあと五機はあるが…」  
「ならその中の四機でいいから貸しなさい」

しかも最後は命令口調である。

「…構わないわ。その代わりに、後の説明は会議室で機体特性と一  
緒に話させてちょうだい」

「もちろん喜んで！ンッフッフ儲けた儲けた」

終いには鼻歌まで歌い出した夕呼に、武達は深いため息をつくの  
だった。

## 第十四話（後書き）

すこしオリジナルになった第三世代の設定です。

GN - 001 / R3 エクシア・リペア3

…リボンズとの最終決戦にて太陽炉を失い、破損したリペア2を改修したもの。

リペア2の武装はそのまま引き継ぎ、擬似太陽炉とセブンスードの武装を搭載した。刃の部分はGNソード改と同じになっている。

GN - 002 / R2 デュナメス・リペア2

…国連軍との戦闘で大破したデュナメスを改修した機体。GNスナイパーライフル以外の武装をケルディムと同じものにしてある。肩のGNシールドはシールドビットに変更され、エクシア同様、擬似太陽炉を搭載している。

GN - 003 / R2 キュリオス・リペア2

…国連軍との戦闘で大破し、鹵獲されたキュリオスを奪取、改修した機体。GNビームマシンガンがツインビームライフルに換装され、最終決戦で使用されたテールブラスターは改良され、ミサイルコンテナを追加された。

GN - 005 / R2 / PH ヴァーチェ・リペア2 フィジカル

…大破したナドレを回収し、新たにヴァーチェの外装を取り付けた機体。武装はフィジカルと同じで、機体にビームサーベルとビームマシンガンを追加された。



そして…ヴァルキリーズが乗る機体は…！

リボーンズガンダム

ガデッサ

ガラッソ

アストレア・TYPE-F

アヘッド

となりました！！

設定で、どうしても後一機欲しかったので、アヘッドは緊急参戦です。

各機体の割り振りは次話にて発表します！

## 第十五話（前書き）

何とか次話です。

## 第十五話

〔 横浜基地 会議室 〕

プロレマイオスから降りた夕呼達は、より詳しい機体の説明を受けるため、動けるヴァルキリーズ共々会議室に入っていた。

「白銀、新しい機体がソレスタルビーイングの戦術機って本当！？」

「グ、グエ…ぐるじい…」

「おやおや。速瀬中尉、そんなに男が恋しいのですか？」

「む…な…か…た…！？」

「ああ…山田…お前何で花畑に…？」

そんな中、水月は武の首根っこを絞めながら美冴にからかわれ、武は危ない世界にトリップしかけていた。

「はいはい！！おふざけはここまでよ。さつさと席につきなさい」

流石と言うべきか、確りと切り替えはできているヴァルキリーズは素早く席についた。…昇天しかけた武を除いて。

「ああ…何故か一人死にかけてるが、今からヴァルキリーズに貸与する機体の説明を始めるぞ！」

そんな武は無視され、夕呼と一緒に入ってきたイアンは始めるのだった。

「まずは、これだ。GNZ-003ガデッサ。遠距離戦を想定されて開発された機体だ。武装はGNメガランチャー、両腕のGNバルカン、緊急時用の近接武器でGNカッターだ」

八口を通して映されたのは戦闘映像だった。モビルスーツの全長程もある砲身を構え、オレンジ色の砲撃を放った。

「コイツの最大射程はケルディムに劣るが、威力に関してはセラヴィークラスだ。…で、次はコイツだ」

質問は最後にしろ、と目線だけで言い、八口に次の映像を映させる。

「お次はGNZ-005ガラッゾ。ガデッサとは反対に、近接戦闘に特化した機体だ。武装は両手の指から出るGNビームクローに肩に付いたGNスパイク、GNフィールドだ。射撃武器がGNバルカン二門だけだが、元々ガラッゾはガデッサと連携することを前提で作られてな、息が合えば百人力だぞ？」

「なら、風間がガデッサ、宗像がガラッゾで決まりだな」

「そうなりますね、伊隅大尉」

「美冨さん、よろしくお願いしますわ」

「…おい、次に行くぞ？」

百合な空気を出し始めた二人を抑え、機体の説明は更に続く。

「三機目は…GN Y-001 F2 アストレア TYPE-F2。先

に香月副司令達に見せた第三世代機の更に一つ前、第二世代機のガンダムだ」

第二世代機と聞いて、水月が残念そうな顔をするが、武器を聞いて目の色を変えた。

「武装は基本武装はGNビームサーベル、ライフルで、GNハンマー、GNビームピストル、ハンドミサイルユニット、NGNバズーカがある。…今言った追加の装備は重装型と言って、別の装備プランもあ「はいはいはい！！私が乗ります！！」…人の話を邪魔するな！」

「いやあ、ハンマーって聞いたらついつい反応しちゃって…」

みちるからの冷たい視線と、「後で……」という呟きを聞いて冷や汗を流す水月。

「別に速瀬でいいんじゃない？元々はエクシアって近接戦特化型の機体の元型だけに、機動力とかは問題ないんでしょ？」

「あ、ああ……って副司令！勝手に資料を取らんで下さい！」

空気がゴチャゴチャになり始めたので、一旦休憩を入れ、最後の二機の説明が始まった。

「んじゃあお次は…CB-0000G/C/Rリボーンズガンダムノキャノン・リペア2だ。何かと因縁のある機体なんだが、性能

は折り紙つきだ。コイツは砲撃戦用のキャノン形態、汎用性が高いガンダム形態の二つに変形できる。…だが、少々問題があつてな」

ばつが悪そうに頭をかくイアンに、みちるが聞いた。

「まさか、操縦すれば衛士が死ぬ…とか？」

「それは無い！改修した儂が言うんだ。…コイツは、二人乗りの機体なんだよ」

イアン曰く、このリボーンズガンダムリペアは、破損した部分を1・5ガンダムのパーツで直した…までは良かったのだが…

「コイツの化け物染みたスペックのせいで、普通の人間だとリミッターをかけても扱いきれんのだ。まあ、物は試しとアストレアのマイスターが操縦、八口に火器管制にしてやっと操れたんだよ」

「…という事は、残っている私と白銀…か……」

「酷ッ！？伊隅大尉、流星にあんまりですよ！！」

みちるの物憂げなため息に、ダウンしていた武はキレるが、周りの隊員は無視しみちるを励ます。

「り、理不尽だ…！」

「…ああ、そういえば。スメラギ、あの二人は後どれくらいで出られるんだ？」

「ははは…もうどうでもいいや……」

ついに武は耐えきれず泣きだし、部屋の片隅で踞った。

「晴子ちゃん…って娘はあと二、三時間ね。茜ちゃんは明日一杯

「よ

何ともないようにスメラギの口から飛び出た内容に、ヴァルキリーズは揃ってポカンとしていた。

「うふふ…。これでも貴女達より三百年は進んだ未来の技術よ。なめてもらっては困るわね」

「…そうか。ならば私と柏木で決まりだな」

「因みに武装がまだだったから今言うぞ。主武装はGNバスターライフルが両手に二丁、ビームサーベルが二本、大型GNフィンフアングが四つだ。キャノン形態になれば、今の武装に加えて強力な砲撃が撃てるようになるぞ」

ダブルオーと戦闘映像を見たヴァルキリーズはおお、とどよめく中、一向に自分の名前が呼ばれないことに痺れを切らした男が立ち上がった。

「あ、あの俺に機体は…?」

「無いわ。だって白銀は淒乃皇のメインパイロットよ」

「……………」

そのまま魂が抜けたように席に戻る武。今度は冥夜達が慰めるが、ほとんど効果はないようだ。

「最後の機体は茜って嬢ちゃんが目を覚ましてからだな。じゃあ、これにて解さ「待ってくれ、イアン」…刹那?」

イアンの言葉を遮り、突如会議室に入ってきたのは刹那だった。

第十五話（後書き）

武「……………（ベキバキ）」

刹「……………（シャン）」

ヨ「あ、あれー？武君は何で拳を鳴らして刹那はナイフ研いでるのかな？？」

武「それは……………」

刹「お前の……………」

武&刹「俺達の扱いが雑だからだ！！！！」

ドガツザシユツベキドゴツグシャツ！！！！

武「ふう……。刹那、お前も災難だったな。こんな作者に書かれて」

刹「お前もな。…さて、作者が復活しない以上、次話の予告は俺達がやるしかないな」

武「だな！」

ヨ「突如会議室に乱入してきた刹那。彼は混乱収まらない彼女等に更なる波紋を産む…次回、機動戦士ガンダム00ALT、第十六話「驚愕」。ごっこ期待！！」

武「あ、お前！？」

刹「まだ生きていたのか…！！」

ヨ「あ、ついでだけど武もガンダム乗れるよ？」

武「え、マジか！？」

ヨ「うん。マジ。では、また次話でお会いしましょう！それでは！！」





## 第十六話（前書き）

やっと更新…短いですが、どうぞ！

## 第十六話

〔 横浜基地 会議室 〕

全員が突然部屋に入ってきた刹那に驚き、誰だろうと話しているヴァルキリーズ達がいる中、一番近くにいたイアンが声を掛けた。

「おいおい刹那、どうしたんだいきなり。というか今までどこに居たんだ？」

「……副司令の執務室だ。みんなが置いていくから動くに動けなかった。案内はそこにいる霞に案内してもらった」

少々ぶつきらぼうに言う刹那。指さす方を見れば、霞のウサミミカチューシャだけが扉から飛び出し、ピコピコ動いている。

ソレスタルビーイングの面々は、そういえば、と刹那を見て思い出し、全員引きつった笑顔を浮かべている。

「それで？何か話があるんじゃないの？」 「…そうだ。だがその前に、ソレスタルビーイングのメンバー以外に俺が何者なのか話す必要がある」

刹那の指示で室内を暗くする。一度目を閉じた刹那は再び目を開くと、そこには七色に輝く瞳 イノベーターの証があった。

「っ!?!」

「まず俺は、イノベーターと呼ばれるGN粒子を媒介し脳量子波で意思、思考の共鳴を可能にした新しい種だ。…わかりやすい例を上げるなら、思考の共鳴は先の戦闘で起きたトランザムバーストによる一時的なものと考えてくれて構わない」

思考の共鳴と聞いて、先の防衛戦で起きたテレパシーを思い出した横浜基地の面々は、アレか！と思いがたつた。と言ってもどういう原理なのかわからないので、ただそういうものとししか認識していないが…。

「そしてあの時、俺は地下から意思を感じた。BETAのだ」

「BETAに意識！？それ本当なの！？」

今まで敵に意識、または感情はない、と認識していたヴァルキリーズは固まり、夕呼は刹那に掴みかかる勢いで詰め寄った。夕呼が担当しているオルタネイティブ4の前身、オルタネイティブ3はESP能力と呼ばれる感情を読む力、リーディングを持った少年少女を大量に“生産”し、BETAとコンタクトを取り和平、もしくはBETAの目的を探ろう、という計画だった。

結果はもちろん失敗。戦闘中に幾度となくリーディングを試みるもBETAは全く反応を見せず、ESP能力を持った者達はBETAに殺されていった。

計画の継続は効果無し、と国連は判断してオルタネイティブ3は凍結。人材、資材のほとんどはオルタネイティブ4に引き継がれ、今の00ユニットを使ったBETAへの諜報活動に移っている。霞はその第三計画の遺産でもある。

話は戻り会議室。マイスターズも驚いてはいたが、鉄原ハイヴで刹那が苦しんだのを知っていたので捕獲されてBETAにされた人間の感情だろうと予想していた。

「ああ。人間とは全く違うものの、な」

「が、違った。人間じゃない。その事実にも、今度こそマイスターズは驚いた。」

「……具体的な…感情めいたものはあったの？」

「わからない。ただ、奴等からは悲しみに似た何かを感じた…気がする」

「悲しみ……」

「そこで頼みがある香月副司令。オリジナルハイヴを攻めるとき、奴等と…BETAと対話をさせてくれ！」

「おいおい刹那、何勝手なことを…！」

と、ロックオンが言うが、以前刹那が助けたアザディスタンの皇女、マリナ・イス・マリーヌの言葉を思い出した。

『人と人はわかり合うことができる。そうすればきっと、争いもなくなる』  
と。

「もし、もしもだ。BETAと俺達人類に悲しいすれ違いがあるならば、争いを無くすことも、人類と手を取り合うこともできるはずだ！」

「…じゃあ、どうしても人類とBETAがわかり合えないとしたら？既に人類とBETAは戦っている。しかも人類側のBETAに対する感情は最悪だわ。例え一時はわかりあえても、必ず綻びが出るほどの、ね」

「………それでもだ。可能性が1%でもあるなら、俺はそれに掛きたい…！」

刹那の覚悟。例え矛盾をはらんでも存在し続けると誓った鉄の意志を感じ取り、夕呼はため息をはいた。

「………全く、青臭いガキの救世主は二人も要らないっての。…わかったわ。でも、それはこちらに余裕があるときだけよ」

「感謝する、副司令」

「さて、時間が掛かりすぎたわ。イアン、早速で悪いんだけど凄乃皇の改造を手伝って頂戴。あとヴァルキリーズ達の訓練も。私は今からオリジナルハイヴの構造データを餌に、アメリカを焚き付けてくるわ。上手くいけばオリジナルハイヴに直接いけるわよ」

期待して待つてなさいね、と言いながら夕呼は出ていき、イアンもハ口達を連れて霞に案内され凄乃皇の下に。みちる達ヴァルキリーズも機体のシミュレーションの為、刹那達と共に動き出した。…ロックオンと武を置いて。

「さて、と。じゃあ武、お前さんは俺についてきな」

「は？ってか何で俺は残されたんですか？」

「すぐにわかるって。コレを見てみな」

「コ、コレは…！？」

差し出されたモノを見て武は恩人を見るような眼差しでロックオンを見る。

「わかったか？じゃ、さっさと行くぞ！」

「はい…！」

二人はそのまま部屋を出て行き、そのまま姿を消すのだった。

## 第十七話

「プトレマイオス 格納庫」

「さて、みんな機体に搭乗したね？今から簡単な動作を覚えてもらおうよ」

ガンダムには、二代目ロックオンが訓練をしたようにシミュレーション機能が搭載されている。トレミー自体にも訓練室はあるのだが、王妃のデユナメスのように特殊なモノがあるコックピットは勿論無く、数も限りがある。そこでスメラギが最初からガンダムのコックピットでしようと決めたのだ。

「ガンダムの操縦法は戦術機とは全くの別物だ。今は応急措置で八口をサポートで繋いでいるが、確りした造りは明日以降まで待つてくれ」

ヴァルキリーズは全員強化装備を着た状態でガンダムのコックピットに座り、網膜投射ではない視点に不馴れしていた。因みに、さつきから通信で指示を飛ばしているのはアレルヤとティエリアだ。

「動作に慣れ次第、そちらのJIVEESのデータを利用した訓練に移る。香月副司令の話では作戦当日は一月一日、あと五日しかない。今日中に全ての動作をマスターしてもらう。いいな？」

『『『了解！』『』『』』』』』

「じゃあ、訓練プログラムスタート！」

「よおお二人さん！遅れて悪かったな」

「ロックオン、何処に行ってたんだい？」

とそこに、遅れてロツクオンがブリッジに入ってきた。ミレイナとフェルトが座っている席に座り、ヴァルキリーズに指示を出していたアレルヤは振り返り、文句を言う。

「ちよつと…な。で、どうだい調子は」

「……正直、まだわからない。資料で見たが、戦術機とMSは全く違う物だからな。操縦法から運用方法、空戦の有無……挙げればキリがない」

「ま、そうだろうな……」

『こ、この私が…機体に負ける…!?!?』

『ちよ、何で行きなり跳んでるのよ!?!? きゃあああああ!?!?』

『あわわわわ!! 全然動きが掴めませえ!! くん!!』

『……………つつぷ』

『あ、彩峰! 機体の中で吐く……………つつえ』

『千鶴さ〜ん、慧さ〜ん、だいじょ〜ぶ〜? 僕は平気だよ〜!』

『くつ……………これは……………想定外だぞ……………!』

『た、大尉!?! さつきから言ってますけど何であたしコレに乗らされてるんですきや……………!!』

『あ、あらあら……………皆さん、大変そうで……………つつ』

『はあ……………キ、キツイ……………』

『……………個性的、だね』

『あ、ああ……………』

『つーか、また一人適応してんじゃねえか?』

全ての機体…もとい少女達の映像を見ながら、乾いた笑いを浮かべるのであった。



「……フフ。アハハハ！ア〜ッハッハッハッハッハ！！勝てる！  
！これなら圧勝だ！！」

そして一人、シミュレータールームで高らかに嗤う声が響き渡り、  
近くを通りがかったフェルトが顔を青くして走り去ったのは別の話  
…。

） 九十番格納庫 ）

イアンは霞に案内された後、大量の八口と共に半壊した九十番格  
納庫に来ていた。そして格納庫内にいる整備兵から淩乃皇の資料を  
受け取り熟読を始める。装甲、重量、機関、最大出力、武装……全  
てのデータを統計し、淩乃皇の強化計画を練り上げていく。

大体の特徴を理解してから、八口達を使ってシミュレートをして  
いると、げっそりと疲れ果てた夕呼が格納庫に現れた。

「おお副指令……大丈夫か？」

「…ええ、何とかね。それで淩乃皇についてわかったかしら？」

疲れている表情を消し、仕事モードに移った夕呼を見て、イアン  
も所々整備兵が取り付いている淩乃皇を見上げる。

「ま、大体だな。この資料に全部書いてあるわけもないし、細か

いとここの説明を頼む」

「わかったわ。コレの正式名称は戦略航空機動要塞、元々は00ユニットの拡張機体として使うはずだった決戦兵器よ。……といっても、主兵装である荷電粒子砲以外の武装は全滅しかけてるけどね」

確かに、機体のあちこちに整備兵が取り付いて換装なり修理なりを行っている。戦車級に嚙り取られた部分が致命的までに多いのだ。

「ふうむ……。この機体、確かムアコック・レヒテ機関とかいう主機から発生する重力場ラザフォードフィールドを使って機体を移動、防御まで賄っているんだよね？」

「ええ。それ以外にも重力場が無ければ荷電粒子砲は発射できないって欠点があるのよ。撃つ際にコックピットを重力場で包まないと、中のパイロットがミンチになるのよ」

そう、凄乃皇の一番機ではそれが起こっている。乗っていた衛士十二人が死んでいるのだ。イアンもミンチになると聞いて、とんだ欠陥兵器だと戦々恐々としていた。

「す、凄まじいまでの欠点だな……。まあなんとかなるだろう。武装の一部は交換が効かない部分をこっちの物に変更するが大丈夫か？」

「大丈夫よ、それよかもってこいよ」

「よし！……だと、GNDドライヴが足りんな……。改造も向こうの方が早い……。補給もあるし一度戻るんだが、預かって構わんか？」

「戻るの！？……って当たり前か……。ええ、頼んだわ」

「まかされた！！」

「ついでに、何でもいいからパーツなりデータなり持ってきてくれない？アメリカが技術寄越せつつあるさいのよ」

うんざりした様子からして、余程しつこかったのだろう。もしかしたら、オリジナルハイヴ攻略作戦を吞ませた背景には、イアン達の技術を渡すとも言った可能性もある。

勝手に自分たちの技術を交渉材料にされたことに不快感を抱きながらも、仕方ないと諦める。……どうせ二百年は経たないと使い物にならないのだし、大丈夫だろうと思っただからだ。

「…はあ。ま、特攻兵器なら腐るほどあるからな、それを持ってこよう」

そして、ヴァルキリーズ達の与り知らぬ場所で、計画は着々と進行するのであった。

## 第十八話

十二月二十九日 早朝 プトレマイオス格納庫

ヴァルキリーズの訓練は、本当にギリギリまで行われた。全員とも機体から降りた途端力尽きた程だ。

だがその甲斐あって僅か一日で基本動作、戦闘機動を修了させ、今日はマイスターズとの戦闘訓練までこぎ着けたのだ。

だが、刹那のダブルオーライザーの姿はない。その事にマイスターズ以外は不思議そうな顔をしているが、事情を知っている者達は成功を祈るばかりだった。

ダブルオーは、凄乃皇転移のために九十番格納庫にいるのだ。理論上ダブルオーのツインドライヴシステムが生成するGN粒子の量は、一基のドライヴが生成する量の二乗である。ソレスタルビーイングがこちらに転移するときは、万が一を考えてツインドライヴを使わなかったため、ぶっつけ本番だが必要なGN粒子の量だけは十分過ぎるほど確保していた。

そして、凄乃皇の転移は今まさに始まるうとしていた。

九十番格納庫

全長150メートルを超える凄乃皇を格納できるハンガーに、ダブルオーは数人の宇宙服を着た技術者達と大量のコンテナの前に立っていた。無論、コンテナは全て転移後にバラバラにならないように連結されており、宇宙服も場所が場所なだけ必要な処置である。

『刹那、下の準備は整ったぞ。いつでもいける』

一人ダブルオーの手のひらに乗っていたイアンは、下の技術者達から準備よしの合図を聞いて、刹那にツインドライヴを起動するよ

う促した。

「了解した。ダブルオー、起動する！ハロ、GNドライブを頼むぞ」

『了解！！ 了解！！』

刹那はダブルオーを起動させ、トランザムの準備をする。一昨日の戦闘からGN粒子を使っていなかったため、すぐにチャージは完了した。

「いくぞ…トランザム！」

ダブルオーの装甲が深紅に染まり、ツインドライブから発生したGN粒子が九十番格納庫に溜まっていく。そして止めとばかりに刹那は最後の鍵を作動させた。

「トランザムバースト！！」

イノベーターの瞳をダブルオーのセンサーが識別し、モニターにトランザムバーストの文字が浮かぶ。すると、二基のGNドライブは唸りを上げてトランザム以上の量のGN粒子を放出した。

『…よし、基準値はクリアだ！跳ぶぞ刹那！！』

イアンが手元の機会に何かを入力すると、ダブルオーの瞳が輝いた。

そして次の瞬間には、GN粒子はもちろん、凄乃皇“二機”の姿は消えていたのだった。

「ブトレマイオス 格納庫」

刹那達が居なくなっても、ヴァルキリーズの訓練は変わらない。昨日覚えた事の復習と更なる指摘を受けた後、マイスターズと一緒に訓練を始めていた。

「狙撃組の場合」

ステージは荒野。障害物も見あたらず、どこまでも荒れ果てた地面が広がる大地に壬姫はデュナメスを狙撃体勢で構えていた。

そして土煙が起こり、デュナメスのライフル型コントローラーを覗き込む。そして射程に入った突撃級に向けて引き金を引いた。

的確にBETAを撃ち抜いていく壬姫に感心するロックオン。そして気付いたのだが、壬姫はある程度の距離まで詰められるとすぐに後退してしまうのだ。デュナメスは狙撃しかできないという概念があるのかもしれないと思ったロックオンは訓練を一旦止め、壬姫をこちらに呼び寄せた。

「いいか壬姫、デュナメスは狙撃特化といってもある程度近接戦も視野に入れているんだ。腰にマウントされているGNビームピストル？だって先端を刃にして相手に突き刺して撃てるようにもしてあるし、ケルディムにはないビームサーベルもあるから近接戦もやるんだ。最悪粒子切れで格闘オンリーも考えられるしな」

「あ、やっぱりそうだったんですね。わかりました！今からがんばります！！」

「よーし、よく言った！！じゃあ俺と格闘戦からだな」

「ええ〜!？」

壬姫の悲鳴を聞きながら、冗談だと頭をなでるロックオンであっ

た。

「戦闘機と二人乗り組の場合」

そしてこちらはアレルヤとマリィ。見ているのは慧と晴子、みちるの三人である。アリオスとGNアーチャーはある意味二人乗りに近い感覚だったので、みちる達も一緒に訓練を受けていたのだ。

「はあああ!!」

「そこっ!!」

みちるが操縦。晴子が砲手という組み合わせは意外とマッチしたようで、良いようにも見える。そして慧はというと…。

「っ……挙動が…!」

キュリオスの一撃離脱戦法にどうしても慣れることができないのだ。戦闘機というものはこの世界では完全に廃れてしまった部類で、もし慧が武と同じ世界出身だったらここまで苦労はしなかっただろう。

「慧、落ち着いて!キュリオスは一撃離脱型、どの機体よりも早く飛び込んでダメージを与える事だけを意識するんだ!」

「わか……ってる!」

「すぐ側にはハ口もいるわ!その子を信頼して!」

「っ!…わかった。行くよ、ハ口」

『合点承知!! 合点承知!!』

武から言われた、協調性を持て。それを思い出し、焦っていた心を静める。そして一息つくくと、シミュレーションを再開させた。

砲撃、近接戦組

「目標ロツク……ミサイル発射!!」

「GN粒子チャージ完了…発射!!」

画面内に映し出されたBETAの旅団に、特定の場所にロツクサイトされる。全てが赤く染まった瞬間、千鶴がトリガーを引いた。禱子もガデツサのGNメガランチャーの引き金を引いた。両足のミサイルコンテナから放たれたミサイルが正確に着弾し、その爆煙が包まれたあとにGNランチャーのビームが直撃した。

橙色のGN粒子は更なる爆発を生み出し、辺り一面が土煙と爆煙で見えなくなる。固唾を呑んで画面を睨む千鶴と禱子。煙が僅かに揺れたと思った瞬間、ミサイルとビームで撃破できなかったBETAが突撃してきた。

「っ！御剣、鎧衣、速瀬中尉！」

「美冴さん！」

「まかせよ！」

「りよ〜かい!!」

「まかせなさい!!」

「OK、任された！」

と、ヴァーチエの後ろに控えていたエクシアとアストレア、ガラツゾ、ガルムが躍り出る。三機ともビームを撃ちながら接近し、ある程度近づくと互いにGNソードを装備し、ガルムはビームサーベルで斬りかかった。

エクシアが範囲を重視し横に一閃し、アストレアは確実に仕留めるため袈裟がに振るう。ガルムはGNバルカンで小型種を潰しながらサーベルで大型種を倒していく。千鶴は各機に指示を出しながら、禱子と共に二機が取り囲まれないようにビームライフル、フィジカルバズーカ、パンツァーファウストで数を減らしていく。



そして戦闘開始から五分、多少攻撃を受けながらも千体程のBE  
TAを何とか裁ききった五機は、ティエリアのアドバイスを聞きな  
がら、改めてガンダムという機体のスペックの違いにため息をつい  
た。

何とか操れてはいるものの、殆ど機体の性能に助けられていると  
言っている。早く慣れなければと心に誓うのだった。

「よし、そろそろ機体に慣れてきたって声も上がってるし、い  
つちよ模擬戦でもしますか！」

休憩時間にロックオンから告げられた模擬戦にヴァルキリーズは  
悲鳴を上げる。どう考えても、今戦ったところで瞬殺が目に見えて  
いるからだ。

「言い方が悪いよ、ロックオン。それだと、僕たちと戦う、みた  
いに聞こえるじゃないか」

「おお、悪い悪い。ま、戦うのは別の奴さ。お前らが機体と格闘  
してる間、一人ですつとシミュレーターに籠もってたんだからな」

別の対戦相手と聞いて安心するも、一瞬で誰だろう？と疑問の声  
があちこちから上がる。だがそれも、ロックオンから乗った乗った  
と急かされてうやむやになってしまった。

「全く、相手が誰だか知らないけど一瞬で終わらせてやるわ！」

「速瀬中尉、そんなに興奮してはすぐやられてしまいますよ」

「宗像!?!」

「…と、御剣が言っていました」

「!?!?ち、ちが…私ではありません!?!」

「おいお前ら、いい加減にしる。……来るぞ」

ヴァルキリーズが乗る第二、第三世代のガンダム達は互いに戦闘態勢を取り、集中し始める。

『ステージは荒野。光線属種も存在しないので高度制限はない。

時間は無制限、どちらかの陣営が壊滅次第終了だ。…では、状況開始!?!』

ズキュキュキュキュキュキュキュキュューン!!

「…?!?!?!」

開始の合図と共に襲いかかってきた八条のビーム。慌てて回避した全機はB小隊と伊隅の二つに自然と分かれた。

「珠瀬、敵は見えないの!?!」

「さつきからやってるんですけど、すぐに移動されて捕らえられないんです!?!」

そしてさらに襲いかかってくるビーム。GNシールドで防ぎながら、千鶴は王姫に敵を探すよう指示するが、ひよこひよこことカメラを動かしていることからそれは事実だとわかる。

伊隅チームも同じよう、GNフィールドを張ったまま動けなくなっていた。

そして突如、ビームが止んだ。何だと思った全員が嫌な予感を感じると、今度はミサイルアラートが鳴り響いた。

「っ！見つけました！！」

デユナメスのカメラが遂に敵を捕らえた。どうやら二機居るようで、片方は青色で塗装された、どこかずんぐりしたイメージを持たせる機体と、もう一機はガンダムタイプだった。

「全機、GNフィールドを維持しつつ前進！これ以上奴らの好き勝手にやらせるな！！」

「……了解！！……」

壬姫と禱子の二機が狙撃で敵の動きを封じ、その間に残りの機体で制圧に掛かる。どうやらそれには成功したらしく、ミサイルもビームも止まった。更に前進しようとした矢先、遂に一機やられてしまった。

「ウ、ウソ！？どこから！？!?」

やられたのは美琴のガルムだった。正面からではなく真横から放たれたビームに足、腕、頭部と吹き飛ばされて撃墜判定を喰らったのだ。

「各機散か…キヤア！！」

指示を飛ばそうとした千鶴もやられた。深紅の機体が駆け抜けたと思った瞬間にはその胴体が真っ二つにされていたのだ。

残ったB小隊が必死で弾幕を張るも、深紅の機体は簡単に避けていき、どんどん距離を詰める。

「くっ…なめるなあああ！！」

冥夜が咆え、GNソード改で敵のビームサーベルを受け止める。だが拮抗は一瞬。GNソードは押し返され、エクシアは胴体に蹴りを入れられて吹き飛ばしてしまう。

王姫もロックオンから教わったように格闘戦を仕掛けるも惨敗。彩峰は機動力を生かした戦術を使うもビームをコックピットに受けてしまい落ちてしまった。

そして深紅の機体はパシューという音と共に静かになり、残った伊隅チームの四機と冥夜を見る。

橙色のGN粒子を翼のように放出しながら、トランザムを終了させたOガンダムは五機に向かって襲いかかった。

## 第十九話（前書き）

れ、連投……。書き溜めを一斉放出しました。

## 第十九話

） side ??? ）

そいつは一人、ひたすらにシミュレーターをやっていた。一つ一つのミッションをクリアしていく毎に歓声を上げ、次のステージが始まれば獲物を見つけた肉食獣のような目で画面を睨み付ける。

そしてぶっ続けること半日。ようやくものにしたと思った男は口ツクオンに通信を入れたのだった。一人の眼帯少女と共に…。

「つて、私は眼帯少女じゃない!!」

五機の機体と相対するOガンダム。トランザムが終わった直後なのか粒子放出量は極めて少ない。それをチャンスだと思っている五機だが、中々襲いかかれないでいた。

「くつ、遠距離からチマチマと…! 砲撃ばっかしてないで正面から戦ええー!!」

『無理ですよ速瀬中尉! 私これ操縦するの今日が初めてなんですよ!?! 姿勢保って撃つだけが限界なんです!!』

「……待て、あれが涼宮じゃないとしたら誰が乗ってるんだ?」

ミサイルと実弾の雨の中、ポツリと零した一言に、まさかと思って通信を入れる。すると、そこには変態衛士こと白銀武の姿があった。

「白銀！？お前、その機体はいつたいなんだ！」

「そうだぞタケル！私はそなたがガンダムに乗るなど聞いてはおらぬ！そなたは淒乃皇のパイロットではないのか！？」

『……………るさい』

「「え？」」

『うるさいうるさいうるさい！！俺は、ガンダムに乗れないっていわれたときどんなにショックだったかわかるのか！？』

「タ、タケル…？」

『ロックオンさんからシミュレーターとはいえガンダムに乗れると言われたときの喜びは…！だから、ロックオンさんの言いつけ通り全員叩きのめす…！』

『ち、ちよつと白銀、落ち着いてよ…！』

そして割り込むように通信を入れてきたオレンジの触覚眼帯…涼宮茜が武を抑えようと必死になっていた。

「す、涼宮…？回復していたのか！？」

『あ、はい。今日の朝に…。そして起きたらいきなり白銀に捕まってる…』

「あ、呆れてものが言えないわ…」

「タケル…そなた涼宮に何をやる気だったのだ…？」

『め、冥夜さん？何故にそんなダークオーラを纏っているのですか？』

何故だろう、シミュレーターに乗っているはずなのだが、冥夜のエクシアから黒いGN粒子が放出されていたのだ。異様な雰囲気のみちる達は忍び足と後退する。

そしてエクシアが顔を上げると、そこには血のように紅いカメラが輝いていた。

『ヒッ！？』

『み、御剣、私は何ともなかったら落ち着いて……！！』

「タケル……覚悟するがよい……」

「わ、私たちは涼宮を叩く！白銀は御剣に任せたぞ！！」

「了解！！」

『あ……！！！！伊隅大尉見捨てないで……』

「うおおおおお！！」

修羅と化した冥夜はエクシアのセブンスソードを巧みに操り、武  
のガンダムは両手両足を切り落とされ、団子にされた後コックピ  
ットをGNソードで貫かれたのであった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8689n/>

---

機動戦士ガンダム00ALT

2011年2月23日13時52分発行